夜廻お姉ちゃん

たゆてー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

山の神を封印して3年……

毎日のように夜に飛び出していく妹が、ある日突然帰ってこなくなった。

警察も諦めてしまうほど見つからない妹を、お姉ちゃん――――ともこが夜に飛び出し、当てもなく探し回る……そんなお話。

※注意※

この作品は原作小説の内容も多少入っているため、初見の方はわからない場合があるかもしれません。絶対ではありませんが、原作小説を先に読むことをお勧めします。

文章力は皆無です。
※要注意※自己満や独自解釈が含まれます。苦手な方は我慢してお読み下さい。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 17
第3話 …… 39
第4話 …… 63
第5話 …… 99
第6話 …… 123
第7話 …… 148
第8話 …… 180

第1話

「ねえ、知ってる？最近出てきた都市伝説！」
「最近？なにそれー」
「えっ!?聞いたことない？結構有名になってるよ」
「んー……聞いた事ないなー。教えてよ」
「本当に知らないんだ。びっくりー」
「しょうがないじゃん、そういうのに疎いんだから」
「あははっ、教えてあげるって。えっとね……その都市伝説、うちの学校の生徒が見たらしいんだ」
「うわ、マジ？身近すぎて寒気した」
「あれ？もしかしてホラー耐性無かったりする？」
「ううん、怖い話は嫌いじゃないよ。続けて」
「うん、それでね、その生徒が深夜にコンビニに行った時に出会ったらしいんだ。都市伝説の正体は、小さい女の子だったんだって」
「へぇー、可愛いじゃん。でもなんで深夜に？」

「そう、そこなのよ。その生徒も不思議に思って聞いてみようとしたの。で、呼びかけたら振り向いたんだけど、その女の子の顔……どうなってたと思う？」
「えー、もしかしてグロい系？口が耳元まで裂けてました的な？」
「それ口裂け女じゃん！流石に違うよー」
「えー？じゃあなに？」
「もうちょっと粘って欲しかったなぁー。もう正解言っちゃうけどいい？」
「いいよ。早く早く」
「うん。それでね、その子の顔がどうなってたかと言うとね……」

「左目が無かったんだって」

――――時刻は昼頃。
私の学校は昼休みだ。
昼食も済まし、次の授業まで席に座って携帯をいじっていた。あと１０分もすれば授業が始まる。

私の名前はともこ。高校生だ。
下に小学生の妹がいる。
妹には左目がない。
なぜかと言うと３年前、私を助ける為に山の神に奪われたからだ。
あれから３年が経つ。

妹は未だに夜に出歩く事をやめていない。
妹は巡回だの、やらなきゃいけないことがあるだのとなんだかんだ理由をつけて夜に飛び出していく。
本当は理由なんて無いんだろうけど……。
夜に片目を置いてきた妹には、何か感じるものがあったのかもしれない。

……そしてそんな妹を、私はもう止めていない。
私がダメと言っても、隙をついて飛び出していくくらいだったからだ。
それに妹は優しかった。
亡くなってしまった愛犬ポロの所にたびたび行き、お花を添えているらしい。

そんな話を知っていれば止めるに止めれず。

かくして私は、妹を止めなくなった。
夜の”ナニカ”は十分怖いけれど、3年前のあの日から”よまわりさん”に目をつけられているせいか、妹に”ナニカ”が寄ってくることが少なかった。

そう言う事もあって、妹の事をどこか信頼しきっていたのかもしれない。

「……」

携帯をいじるフリして、周りの人の話を聞く。流行り物が好きなクラスメイトは、すぐにそ、う、い、う、話、に食いつく。

――さっきのクラスメイトが言っていた都市伝説は本当だ。

そして紛れもなく私の妹――”ことも”のことだ。

左目が無いことが分かるということは、眼帯をしていないのだろう。何かによって外されたのか、あるいは自ら外したのか。

眼帯を外してしまうと、妹のクラスメイトに怖がられてしまうらしい。

だから、自分から外す事はまず無い。

そして神出鬼没。

どこを彷徨い歩いているかわからないという。

もっと現実的に言うと、現在妹は行方不明だ。
数日前、いつも通りに夜に飛び出して行ったっきり帰って来なくなった。
もちろん警察に捜索願を出した。
目撃情報はある。どこかで見つかるはず。

――しかしそんな考えとは裏腹に、未だに見つからない。
その事実だけが、今の私を焦らせていた。

「はぁ……」

ため息を吐く。
ただ単に夜に依存し過ぎて帰って来なくなってしまったのか、町を徘徊する”ナニカ”に襲われてしまったのか。
それとも……山の神にまた目をつけられたか。
考えうる最悪の可能性が頭の中に浮かぶ。

ポロの時もこんな感じだったっけ。
まだお父さんには言っていない。
帰って来れないお父さんに、変な心配をさせてしまっては仕事に差し支えると思ったからだ。
言うなら、全てがはっきりしてからだ。
妹の安否の確認が取れてから。

キーン……コーン……カーン……コーン……

始業のチャイムが鳴る。
ガヤガヤしていた教室内が次第に静かになる。
私は携帯をポケットに滑り込ませ、授業を受ける準備を整える。

「……はぁ……」

何度吐いたかわからないため息を、再び吐く。

なんの音沙汰もない事が気にかかって仕方がない。
私が守ると決めておきながらこのざまだ。
綺麗事だけで、なにも守れてない。
そんな私への失望。それによるため息でもあった。

時刻は夕暮れ。
もう晩夏だと言うのに、残暑が厳しい。立っているだけで汗が滲むほどだ。蝉の音がうるさいくらいに、夕焼けの空に響く。
学校も終わり、一緒に下校していた友達とも途中で別れ、家の前まで来ていた。
いるわけがない妹の姿を願いながらドアノブに手をかける。もし開いていたら……。

……しかし、鍵はかかっていた。

わかっていた事だったが私は少し落ち込む。
可能性が0ではないせいで、どうしても期待してしまうのだ。
ふとポロの小屋を見る。
ポロがいなくなったあの日から、私に代わって妹が毎日綺麗にしてる犬小屋。
今はまた私がしているけれど、『ポロ』という名前の札を見る度にどこか胸が痛くなる。

……妹もそれを感じていたのかも。
そんな事を思いながら、私はカバンから家の鍵を出し、ドアを開けた。

「ただいまー」

返事を求めるかのように少し大きめに言ってみた。当たり前だが返事はない。
2階に上がり、カバンを置く。
夕食を作らなくては。

妹が居なくても、必ず2人分を作る。いつ帰ってきてもいいようにだ。

忙しなく物が動き、やがて夕食が出来上がる。

「いただきます」

今日もまた1人の食卓。
いつもなら妹の学校での話を聞き、そして昨日の夜の話を聞く。
しかし今は静寂に包まれ、響く音は茶碗や箸が掠る音。

「……」

正直、気が滅入ってきてしまっていた。
頭の中から常に不安が消えないし、何も解決しないまま過ぎ去るこの時間が苦しかった。
後悔ばかりだ。
起きてしまった事は仕方がないとは言うが、こんな状況下において、そんなもので割り切れる人はいないだろう。

――ああ、私はなんて甘いんだろう。
少し考えればわかった事なのに。
そう思う度、自身の情けなさに涙が出てきそうになる。こんなことになるという事は結局、”私の決意は口先だけだった”という事への証明になるからだった。

午後9時。
妹がいつも夜に飛び出して行く時間。
そして、堪らなく寂しくなる時間。
朝起きれば帰ってきている事が分かるので、寂しさを紛らわすようにさっさと寝てしまう時間でもあった。

しかし、妹は帰ってこない。
妹は居ない。

「……」

冷めきった夕食にラップをかけ、冷蔵庫にしまう。そのままなら明日の朝食になる。

「はぁ……」

ふとため息が出る。

……もう寝てしまおうかな。

朝になったら、ひょっこり帰ってきている気がして。いつも通りに「おはよう」と言ってくれる気がして。

絶対に無いと知りつつ、そんな淡い期待をどうしても抱いてしまう。

……もし帰ってきたら私は怒ってしまうかな。泣いてしまうかな。それとも、何も言えないのかな。

――――きっと、どれも当てはまる。
私は基本妹に怒ろうとはしない。妹は怒られずとも分かってくれる良い子だから。
でも、今回ばっかりはいっぱい怒ってしまいそうだった。
こんなに心配して、疲れて。
気力まで削がれて。
そんな心境で、ふらっと帰ってきた妹を怒らずに迎え入れる自分が想像できない。

ヴーッ、ヴーッ……

「きゃっ」
携帯が鳴る。私の耳は静寂に慣れすぎてしまったせいか、こんな音にもびっくりしてしまう。
慌てて携帯を取り出す。
画面に表示されていたのは〝警察署〟だった。
もしかして……！

「……もしもし」

『夜分遅くにすみません。こちらの番号は……』

少し安心する声。しかしその声とは裏腹に、伝えられた内容は辛い物だった。

『……なので、本当に申し訳ございませんが……捜索はこれで打ち切らせて頂きます』

「……はい。ありがとうございました……」

電話を切る。

警察を持ってしても、妹が見つからなかった。

警察に見つけられなければ、私が見つける事は無理に近いんじゃないだろうか。

「……なんで……」

私はその場に座り込む。

頼れるものはもう無くなった。妹は完全に行方不明。行方不明者として掲示板に貼

られるだけで、あとは完全に目撃者頼り。

――そんなので見つかるわけがない。

しかしこの状況は、私の中のある衝動を動かすきっかけとなった。

「……私が、行くしか……」

お母さんにも、ポロにも守るって決めたんだ。私が守らなくてどうするんだ。

こんなんじゃ、きっとお母さんやポロに怒られてしまう。

見つけるのが不可能に近いから、何だ。

そんな理由で、私はまた逃げるのか。

もう、私は家族を見捨ててしまうほど弱くないんだ。

私は小さなポシェットを物置から出す。夜に出るんだ。”ナニカ”に会うのは確実。

石ころでもなんでも、何か持っていけるようにしなければ。

家の電気を消し、外に出る。
最後に家の鍵をかけた。

深呼吸。
大丈夫。今の私ならもう”ナニカ”からも逃げ切れる。小さい頃とは違う。
「こともを……探さなきゃ」

――――そして私は、夜に飛び出した。

第2話

コツコツコツ……とアスファルトを蹴る音が、夜の町に響く。
小さい頃から変わらない景色なのに、夜に歩くとどうしても3年前の感覚になる。
懐中電灯の丸い明かり、肌に纏わりつくような空気、どこからともなく吹く風。
それらは私に夜の怖さを思い出させた。

「……」

怖いのは今更だ。怖気付いている場合じゃない。

しばらく歩いていると、私は電柱のそばにいる”ナニカ”を見つける。
昔からずーっと、あの場所に立っている。
目も合わせずサッと通り過ぎる。何かを囁くような声で追ってくるが、子供の頃の走るスピードとは違いあっという間に引き離した。
あれに捕まったら、どうなるんだろう。

殺されるのは確実……なのかもしれないけど、実際あれが生きている人にどう関与できるのかわからない。

「……それでも捕まりたくはないな」

苦笑し、目的地へと少し足を早めた。

私がどこに向かっているのかというと、ポロが眠っている林だ。

町中を捜索して見つからないという事は、町以外にいるのではないか、という至極簡単な予想だ。

学校での噂話のように、夜の町を歩いている可能性もあるが……。

実は先に林に行くことにもう一つ意味がある。

妹の話によると、3日に一度はポロに会いに行っていると予想出来た。いなくなった

あの日から計算すれば、今日会いに行くはずなのだ。
そして、必ずちいさなお花を添える。
それを確認する事ができれば、妹は再びそこに来る事があると言える。
現在、２１時半。
家を出てから真っ先にポロの所に行く妹なら、もう花が置かれていてもおかしくない時間だ。

早足で歩いているうちに、踏切に着く。
今日はまだ鳴ってない。ここの踏切は０時を過ぎると、何故かわからないが勝手に遮断機が降りて鳴り止まなくなる。
こない電車をひたすら待ち続ける……子供の頃は音が怖いとしか思えなかったが、今はそんな事はない。

踏切を渡り、更に奥へと進む。その先の別れ道を左に進む。右に進めば商店街だ。
だんだんと建物と草木の割合が逆転していき、遂にはアスファルトの道が途切れる。
硬く響いていた足音が、ザッザッ……と土を踏む音に変わる。
僅かに聞こえていたコオロギの音色も、近くではっきりと聞き取れるようになる。

しばらく歩くと、青いフェンスが見えて来る。手前にはお地蔵様があるが、触れようとすると首の部分がコロッと落ちる。

最初に触った時はもちろん驚いたが……。

踏切同様、今じゃ驚かなくなっている。

無視して進み、青いフェンスを抜ける。

「そろそろ消さないと……」

ここは岩ですら危険。彼らに光を当てれば、低い唸り声をあげながら襲ってくる。スピードもなかなかあり、下手すれば今の私でも追いつかれる。

その反面、ここは町にいた”ナニカ”は少ない。

基本寂しがりの”ナニカ”達は、こんな暗い場所には来ない事が多いようだ。

私は懐中電灯の灯を消した。

辺りがパッと暗くなる。

そして青いフェンスを通った先にある別れ道を左へ進む。

「……ッ」

心臓が激しく脈打つ。
光を消していればバレないといえど、それでも近くを通り過ぎるのは怖い。
それに私の子供の頃と違って、”ナニカ”がここにどれだけ増えたかもわからない。
急いで岩の間を抜け、再び懐中電灯をつける。暗闇に光が見え、少し安心する。
更にけもの道に沿って奥に進むと、昔の古い線路に出る。
妹の話では、この線路はまだ電車が通っているらしい。その電車からは誰かが泣いている声が聞こえるという。

「……まるで幽霊列車ね……」

事実、幽霊列車なのだろう。
そんな事を考えながら、線路を横断する。
再びけもの道に入り、沿って歩く。
しばらく歩いていくと、突然ボコッと空いた穴を踏んだ。

「なに……？」

咄嗟に足元を見ると、水溜りが乾いて泥になった所に小さな足跡があるのを見つけた。

子供のような、小さい靴の跡。

「ことも……？」

私はそっと触れてみる。かなり固まっていて、形が崩れる事はなかった。

それもそのはず、妹は3日に一度来ている。

この道も妹以外で通る人はいないだろう。

「……来てる……のかな」

――足跡がこう残るのは当たり前のことだったが、私にとってはどこか心の救いになっていた。

やがて開けたところに出る。その中央にはボロのお墓がある。

私は近づき、お墓の前にしゃがむ。

「……ダメか」

かなり元気がない花が一輪。

妹はもうここには来ていない事を示していた。

正直、現時点でかなり可能性が絞られた。

妹は自分の意思で動いていない可能性が高い。

つまり、都市伝説のように――町の”ナニカ”と同じものになったという可能性が第一にくる。

そんな考えが頭をよぎる。

それから色んな想いが私の内から溢れ出て、目頭が熱くなった。

いつの間にか、涙が滲んでいた。

後悔と、申し訳なさと。それらに私の心はいっぱいになってしまった。

そんな歪んだ視界に入るポロのお墓は、どことなく私を責めたように見えた。

「ポロ……ごめんね……」

だんだん実感が湧いてくる。それに比例して、ますます辛くなる。

私は何をしてたんだろう。

妹は小学生。1人で危険な夜を出歩いているというのに、なぜ意地でも止めなかったのだろう。私以外の人だったら、誰でもきつく叱りつけて家に置いておくだろう。

私が弱いせいで出来なかった。

私のせいで———

「ワンワンッ！」

どこからか犬の鳴き声が聞こえた気がした。私は驚き、あたりを見回す。
しかし、周りには何もいない。
動物の気配すら感じられない。

でも、この声は……。

「……ポロ？」

それに応えるように、再び鳴き声が聞こえる。

「ワンッ」

……情けないなあ。

私はポロに、〝今度は私が妹を守る〟って約束してたのに。

「ポロ……あのね」

「ワンワンッ！」

私がその先を言う前に、ポロは被せてくる。

ごめんね。聞きたくないだろうけど、私はポロに言わなきゃいけない。

「ポロ……あのねっ、私……こともを守りきれなかったの……」

私はそう言い切った。

ごめん。ごめんなさい、ポロ。

あなたが守ってきてくれたもの、私は台無しにしてしまったの。

――――なのに。

「わんっ！」

そんな私の悲しさを吹き飛ばすように、明るく鳴くポロ。

「……ポロはどうして怒らないの？私は妹を守れなかったんだよ？」

それでも変わらず、悲しい鳴き声ではなく私を励ましてくれるポロ。

私はそんな様子のポロの声を聞いて、少し――――いや。

「こともは……まだ助かる？」

「わんっ！」

私の問いに、ポロはそれを肯定するかのように元気よく吠えた。
……かなり、励まされていたのだ。
その声で、私の頭がさっきの焦りや後悔に満ちた思考が消え、急速に冴えていった。

――そうだ。何を悲観しているんだ。
こともがここに来れない理由があるなら、それも可能性の一つになる。
町にも林にも居ないのなら、”よまわりさん”に攫われて、工場から抜け出せない可能性だってある。

そして工場なら、コンテナに隠れていれば”よまわりさん”に見つかる事はない。
――助けを待っている可能性がある。

「ありがとう、ポロ」
「……ワンッ！」

返事はそれきり返ってこなかった。
……が、私の心はかなり救われていた。

「とりあえず工場に行かなきゃ。もしかしたら動けなくなって、助けが来るのを待っているのかもしれない」

私はポロのお墓に花を一輪添え、来た道を戻った。ここに来た時とはうってかわって、自信のある足取りだった。

妹の失踪に一切手を出せなかった私が、今こうして動けている事が実感できたからかもしれない。

しかし、私はふと思いつく。

「……工場って、今入れるのかな……」

普段工場の入り口は開く事がない。しかも開く条件が全くわからない。気づいたら開いている事があったというくらいだ。

これでは侵入は難しい。

あの”よまわりさん”の居城といえるべき存在の工場の入り口で、開くのを気長に待

つだなんてそんな危険な事はできない。

「……攫われた方が早いのかな」

私は3年前に一度攫われた覚えがある。危険な事には変わりないが、工場に連れて行かれる分には死ぬ事はない。

荒技だが、安全に工場に侵入できるだろう。

しかし、問題はあった。

「困ったな……」

”よまわりさん”に攫われないようにするのは難しく感じるのに、”よまわりさん”を見つけるのもかなり難しそうだ。

しかもこんな夜。

視界がただでさえ悪いのに、”よまわりさん”を見つけるというのは更に難易度が上がる。

捕まるまで彷徨うか。
なら見えやすい場所がいい。
灯りが多い場所と言えば……。

――商店街だ。
取り壊されかけてるが、街灯はそのままだ。あそこなら簡単に見つけてもらえるかもしれない。
……そういえば、過去に妹が一度商店街の”ナニカ”を、ムカデの神様?に頼まれて祓ったと聞いた事がある。

いや……それは隣町に住んでたハルちゃんだったかな?
ハルちゃんと言えば去年引越しして行ったんだったっけ。引越し前に一度会わせて貰った事があるが、なんだか悲しそうだった。
まだ小学生だというのに、左腕が無かった事には少し驚いたけど。
商店街の”ナニカ”を祓えるくらいだ。きっとあの子も”ナニカ”達に関わりすぎ

て、色々な事に巻き込まれたのかもしれない。
そのせいかどうかは分からないけど、会った時ハルの両親も含めて3人の筈なのに、もう1人の気配があった。
悪い感じはしなかったが、この世のものではない”ナニカ”なのは間違いなかった。
そういう”ナニカ”がハルの側にいるのはあんまりよくなかったりする。

……まあ、その話は置いといて。
なんにせよ商店街に行けば、”ナニカ”が少ないかもしれないし、上手く”よまわりさん”に会えるかもしれない。

道なりに歩いているうちに、アスファルトの地面が戻ってきた。街灯が徐々に増え、周囲もさっきと比べて明るくなってくる。

「ッ……！」

私は改めて気を引き締める。
ここからはまた”ナニカ”達に充分注意しなければならない。

さっき踏切を通って降りてきた道の、反対の右側に行く。
道に沿って歩くと、やがて商店街の入り口が目に入る。

「……そうだ」

折角来たなら、神社にお参りしに行こう。何度か妹を守ってくれた事へのお礼がしたい。
しばらく歩くと鳥居が見えてくる。遠目でざっと神社を見る。

壊れかけの神社。
商店街の取り壊しによって、神社も取り壊しになってしまった。
妹いわく、商店街を包み込む程の大きさらしい。そんな大きなムカデがいるのなら、私は即座に悲鳴をあげて逃げる自信がある。
とりあえずお賽銭箱だけ壊れてないままあるし、手持ちの十円玉でも――――

瞬間、背後に何かの気配を感じた。

私はサッと振り向いた。

商店街の入り口の近くに、炎に包まれて激しく燃える黒い人影。

両手を振り上げ、燃えている事が苦しいかのように叫び声をあげている。

……明らかに出会ってはいけない”ナニカ”だった。

確実にこっちを見つけて追ってきている。

目で見ただけでも相当速い。

叫び声がなんとも恐ろしい。

私は咄嗟に走る。

鳥居の前を通り過ぎ、更に奥へ。

しかし、あまりにも速すぎる。

声がどんどん迫ってくる。

「やめてっ……来ないでっ……」

徐々によみがえる、死と隣り合わせの恐怖。子供の頃に感じていた夜の恐怖。

私は油断していた。

頭でどれだけ”ナニカ”に気づかれてはいけないと考えていても、子供の頃とは違うという”油断”がどこかにあった。

商店街ならムカデの神様なるものがいるから安全と、どこか勝手に決めつけていた。

普通に考えて、灯りの下で立ち尽くすなんてまるで「見つけてください」と言っているようなものだ。

基本”ナニカ”は辺りにいる。

夜を歩く上で最も注意しなければならない事。

「だっ……誰かっ……！」

そう叫びかけて、やめた。

夜に1人で外を出歩くという事はそういう事。

助けなんか来ない。

”ナニカ”との距離が10メートルを切った。

まだ数十秒しか走ってないのに、もうこんなに追いつかれた。
私は全ての力を振り絞って走る。
震える足を奮い立たせ、折れても構わない勢いで走る。
……しかし疲労は限りなく、私の足の動きを鈍くする。
速度が下がる。
「はぁッ……こんなとこでッ……」
死にたくない。
そんな私の意思とは反対に、足の動きが悪くなる。それなのに背後の”ナニカ”の速度は全く落ちない。
……もうダメなのか。
そう思った時。

数メートル先にある公衆電話が、鳴った。
明らかに壊れた音で不気味に鳴り響く。

「な、なに……？」

私の知らない”ナニカ”？
でも、このまま死ぬくらいなら……。

助けてくれる、”ナニカ”もいるかもしれない。……確率は0に等しいけど。

私は公衆電話に駆け込む。外観のガラスは割れているため、すぐに受話器を取る事ができた。

瞬間、視界が暗転する。
空の黒が垂れる様に私の視界を奪っていく。

……そりゃそうか。

助けてくれる”ナニカ”なんて聞いた事がない。

でも焼け死ぬより、マシだといいな……。

私はギュッと目を瞑った。

第3話

「……？」

目を瞑って3分くらいは経った。
これが……死？
痛くない。でも……

「ごほっ、ごほっ……」

自然と息をするのを抑えていたせいか、酸素が足りなくなり急にむせる。
口を手で押さえながら目を開けた。

――そこに広がっていたのは、紫色の世界だった。さっきの追ってきていた”ナニカ”はいなかった。
空を見上げるとそこには……。

……どこまでも続いているような、虫の胴体があった。
細い虫のような足が、所々抜け落ちているが沢山生えている。
これって……超巨大なムカデ……!?
「っきゃあぁあぁっっ!!!」
想像が頭に浮かぶ。私は反射的に悲鳴をあげ、その拍子に尻餅をついた。
ゴソゴソと蠢いているその姿に、私は悪寒を感じた。
その時、妹の話を思い出した。

……そうだ。
紫色の世界、巨大ムカデ。

――この商店街の守り神だ。
それなら、もしかすると……
私はフラフラと立ち上がり、急いでムカデの神社まで行った。
神様なら、妹について何か知っているかもしれない。
疲れ切った足でなんとかたどり着く。
鳥居をくぐり、境内に入る。

「あ、あの……！」

そう言いかけた途端、世　界　が点滅した。
一瞬だけ、元の世界の色に戻ったのだ。

「……これって」

神様は信仰することによって存在を維持していると妹から聞いた事がある。
そのことからすれば、商店街の取り壊しによって人が来なくなった事で、恐らくムカデの神様の力が弱ってきているのだろう。
今も信仰してる人って、いるのかな。
取り壊された今もお参りに来てるのは、妹くらいしか思いつかない。
それでも、あの山の神よりは信仰されている。

「あ、あのっ！頭に大きな赤いリボンつけた子供を見ませんでしたかっ！」

神社に向かって叫ぶも、返事は帰ってこない。
私は構わず続ける。

「その子は、まだ……まだ生きてますかっ！」

そう聞いたやいなや、私は元の世界に戻っていた。あたりを見回したが、もうすでに

あの大きなムカデはどこにもいなかった。

「……無理か……」

私はお賽銭箱に十円を入れた。
妹のことを聞くよりも、助けていただいた事に対して先にお礼を言うべきだったな。
少し申し訳ない気持ちになりながら、改めてお礼をした。

「ありがとうございます」

そう言って一礼する。

「……さて、早く〝よまわりさん〟に工場に連れて行ってもらわなきゃ。」

そう呟いて振り向く。その時、石畳の上に何かが落ちているのが目に入った。

「これは……？」

塩の入った袋と、御守り？のようなもの。
ムカデの神様がくれたのかな。

私は近寄り、塩と御守りを手に取った。御守りの方からカサっと音がした。

「〜〜ッ！」

一瞬ムカデを想像し固まる。しかしそんな事は無い事を、見てすぐにわかった。
御守りだと思っていたそれは、小さな袋だったようだ。
中に一枚の紙切れが折り畳まれて入っていた。

「……手紙？」
懐中電灯に照らされて、文字が多少見える。
私はおもむろにその紙を開く。
内容は子供っぽい字で、全てひらがなで書かれていた。私は読んでみる。

『このかみをよんでいるひとにおねがいします』

「お願い……？」

そう言えば隣町で、手紙を書いて紙飛行機にして飛ばすっていう遊びがあるんだっけ。

わざわざ山から飛ばす人もいるくらい流行っていたらしい。

それがここまで飛んできた、って事かな。

そう考え、私は続きを読む。

『わたしのおねえちゃんに「てのいうことをきいておかあさんをたすけにいくから、いえでまってて」とつたえてください』

てのいうこと……？

……手の言う事？

私は読み直す。

「……私のお姉ちゃんに、手の言う事を聞いてお母さんを助けに――――」

そこまで読み、心臓がドクンと波打った。

頭がサーっと冷えていく。

まさか。

いや、そんな事……！

考えを否定する材料を探すべく、さらに読み進めると、そこには一つの住所が書かれていた。

「この住所は……」

自宅の住所が記載されていた。この手紙で指す〝おねえちゃん〟は私のことで確定した。

となると、これは妹が書いて残したものになる。

「な、なんで……」

私はへなへなと座り込んだ。

そ、れ、が危険だと言うのは、妹が一番わかってるはずなのに……！

”手”には私自身、3年前に一度さらわれたことがある。

山の神様への生贄として捧げられるために。

どうしてか”手”の言う事を聞いてしまった妹に色々思うところがあるけど、それどころじゃない。

またあ、の、山、に行かなければならない。恐らく妹はあの山にいるはずだ。

私は袋をギュッと握った。

「……？まだ何か……」

袋の中にまだ何か入っている。

私はそれを取りだした。
――――それは私が妹に預けた御守りだった。
私が小さい時から持っていた御守り。

……安全に連れていく為に、置いて行かせた可能性が大きい。
だとすると、妹は完全に無防備。
抵抗する手立ては何一つない。

それなら尚のこと、急がなきゃ。
私は拾ったものをポシェットに入れて走り出す。

鳥居を潜ったところで、前方に人影を見出す。私は咄嗟に”ナニカ”だと思い、足を止める。

「……？」

人影にしては、小さい。

それに”ナニカ”のように真っ黒でも燃えているわけでもない。
あれは……。

「……？」

――リボン？
大きなリボンだ。
私はそ、れ、に近づいてみる。
しかし、そんなに近づかなくてもそれが何かはすぐに分かった。

「こ……こともっ！」

妹が商店街入り口で立っていた。
私は急いで妹の元に駆け寄った。
近づくにつれ、いろんな感情が湧き立つ。その中で特に強かったものが私の中から出た。

「家にも帰らないでどこ行ってたの！散々探したんだよ！」

私は語気を強めてそう言った。

しかし。

「……」

妹は黙ったまま。どこか上の空のよう。

なにより、私に気づいてないように見えた。

「ことも……？」

妹との距離……約５０センチ。

だと言うのに、妹は私を見ていない。

――何かおかしい。

普通ならもっと反応があるはずだ。

すると、妹は商店街の方を向いた。

「ことも……？」

私はもう一度名前を呼んだ。しかしその声に全く振り向く事なく、商店街の中に向かって走り出した。

「ま、まって！」

私は妹を追うべく走り出す。

さっき”ナニカ”に追われた時の足の痛みがズキンと響いて、追いつけるはずの妹に追いつけない。

どんどんと距離が離れて行く。

私は焦りを感じ、妹を呼ぶ。

「こともっ！待ってっ！」

妹の足が止まる事は無かった。どんどんと広がっていく距離。
その時、妹が背負っているうさぎのリュックから何かが落ちたのを見た。
取っている暇はない。今は妹を――――。

そう思ったのも束の間。

「……え？」

商店街の十字路の右側から、何かがすごいスピードで突っ込んできた。私より大きい。

「なっ……」

声を上げる間もなく、私は横から出てきた黒い物体に突進された。

「……ん……？」

目を開けると、目を開けたかもわからないような真っ暗な世界にいた。

「ここは……？」

私は立ち上がろうと地面に手をついた。この時点で、私がどうなったわかった。

冷たい鉄の感触。波のようにでこぼこしている鉄の板。

……コンテナの中だ。

と言う事はつまり……。

――――工場だ。
さっきの商店街で横から現れたのは”よまわりさん”だったんだ。
目的地は合っていたが……妹を見つけた今、ここには用がない。
”よまわりさん”に見つかる前に、早くここから出なきゃ。
最後に来た3年前のあの時と違って、コンテナの中でじっとしているわけにはいかない。
あの裏返ったような姿に出会ってしまったら、流石にまずい。
……とりあえず、ここがどこのコンテナなのか。それを確かめる必要がある。
運が良ければ入り口近くのコンテナ。
悪ければその他の離れたコンテナだ。
私は門の近くである事を願いながら、コンテナを開ける。
「……」

入り口近く……ではないコンテナだ。
しかし、ここの通路は門に近い。

だが、まだ安心はできない。

懐中電灯をつけ、あたりを見回す。遠くに”ナニカ”がいるのが見えるが、こちらにまでは気づかない距離だ。

「早いとこ逃げなきゃ……」

私は早足で門を目指す。
ここでは”ナニカ”や”よまわりさん”以外に注意しなければならない事がある。

それは門が開いているかどうか。
いくら門が近くにあったといえど、開いていなければ出ることは叶わない。それだけは避けたい。
そして一番厄介なのが、門付近から背後に”よまわりさん”が来てしまった場合だ。

逃げ道は”よまわりさん”がいる方向しかない。
何故なら周りには瓦礫があって上手く避ける事ができない。登ればいけるだろうが、そんな隙を見せたらすぐに捕まるだろう。
見つからずコンテナに戻れればチャンスを窺えるものの、見つかって追い詰められてしまってはどうしようもない。

そんな絶対に避けたい可能性を考えながら、やがて工場と外の境に辿り着く。

「……そう上手くはいかないか」

私はため息をついた。
門が開いていなかったのだ。
……仕方ない。
とりあえず、近くのコンテナに入ろう。
そう考えた私は門に1番近いコンテナに寄り、扉を開けようとした。

――しかし。

「あれっ、開かない……」

錆び付いているのか、それとも歪んでしまっているのか。どちらにせよ、コンテナの扉が開くことは無かった。

「……ツイてないなぁ」

もう一度さっきのところに戻って、時間を空けてから来るしかない。
隠れる分には前のコンテナでも問題ない。

――さて。
問題はここからだ。

「……来ませんように」

昔からの古いお守りを握って祈る。
それしか出来ることはない。

カツカツ……と古びたコンクリートの上を、早足で歩く音が鳴る。その度に、近くにいる虫は鳴くのを止める。
おもむろに携帯電話を取り出して時間を見る。
午後１０時半。
いろんな目にあったというのに、まだ1時間程度しか経っていなかった。
夜の時間と昼の時間は同じようで違う。
夜は起きていれば時の流れが遅いように思う。
しかし、それは救いでもある。
こともの居場所の手がかりはだいぶ掴めている。時間に関してはまだ困ることはない。

……夜に対する恐怖を除いて、だけど。

この短時間で色々な目に遭いすぎて、私の弱気な部分が足を震えさせる。今すぐ逃げ出したいという思いが私の行動を縛る。
克服なんてできないこの恐怖は、本当にどうしようもない。それが唯一困っている事だった。

やがて戻ってきた私は、コンテナを静かに開ける。こっちも錆びているせいかスムーズに開かない。
キィィ……と軋む音を立てて開く。その音でさっきと同じように、虫の鳴き声が消える。
私は再びコンテナに入り、扉をそっと閉めた。

しんと静まり返ったコンテナの中は、3年前を思い出させる。
言うまでもなく、あのおかしな男の事だ。
3年前に殺人罪で捕まった事を知ってから、どうなったかはわからない。

正直、知りたくもない。
あの男のせいで私は山の神様に攫われ、結果として妹が左目を失ったのだから。
……根本的に言えば、その男が悪いわけでもない。ポロの死を受け入れられずに、妹を置いて外に飛び出した私が一番悪い。
それはわかっている。けれど……。

コンコン

「ッ……!?」

コンテナを叩く音。
私は思わず動揺し、ガタンと音を立ててしまった。

「しまっ……」

言いかけた口を慌てて塞ぐ。塞いだと言っても時すでに遅し。
こちらは音を立ててしまっている。

外に何かがいる。
そしてそれに今、気づかれてしまったかもしれない。

――――苦しい時間が流れる。虫の声がしない分、心臓がドクン、ドクンとうるさいくらいに頭に響く。
”よまわりさん”にしてはおかしい。
”ナニカ”はこんな見えてない相手に干渉してくる事はない。
それ以外……もしも人だったら、一番怖い。

「……」

徐々に虫の鳴き声が戻ってくる。
あまりにも時間が経ちすぎていた。

もう去ったのだろうか。
それともまだいるのだろうか。

……待ち構えている可能性は充分にある。
かと言ってこのままではここから脱出することは叶わない。
私に残された選択は一つしかなかった。

――――よし。
私は意を決して、コンテナを静かに開いた。

第４話

キィィ……

軋んだ音を立てて、コンテナがゆっくり開く。出た瞬間何をされるか分からないのでいつでも閉めれるような位置で音を探る。

「……」

ドクン……ドクンと、心臓の音が邪魔をする。

コンテナの隙間から風がヒュウッと舞い込んで耳を撫でる。

それでも懸命に探る。

探らなければ最悪死んでしまう。この状況はそんな危険をはらんでいる。

……しかし、音どころか気配すら感じない。

コンコンコン……

再び音がした。

少し開けている上にすぐ真横から音がしたせいで心臓が飛び出るほど驚き、私は飛び上がった。

「きゃっ！」

ゴーン……

鉄に頭が当たった音が鳴り響く。かなりの痛さに私は反射的に頭を押さえる。

「〜〜〜ッ！」

その瞬間、私はハッとし咄嗟にコンテナから飛び出した。もちろんこれだけ音を立ててしまっては気づかれないわけがないからだ。

確実にバレた。逃げなきゃ。
そう思い、逃げようとした時。

……コンテナの扉に、風で流された小石が当たってコンコンと音を鳴らしているのを見た。

気づけば少し風が強くなっている。そのせいで飛んできた小石がノックしているような音に聞こえたんだ。

「は、はは……」

私は苦笑し、その場に座り込んだ。
理由がその程度と言うことを知って気が抜けてしまった。

「お、驚かさないでよね……」

何事もなかったかのように、周囲の鳴き虫が再び騒ぎ出す。緊張から一瞬だけ解放さ

れた身体は眠気を呼んだ。

「ふあ……」

あくびがひとつ出る。

その緊張感の無いあくびに、私は再び苦笑する。

いつもなら寝てる時間だ。それに走り回ったり過度に気を張り詰めていたのだ。眠くないわけがない。

「ダメダメ……眠気を覚まさないと」

こんな所で寝たら死ぬに決まってる。大体妹がこの一晩でどうなってしまうかもわからないのに、寝てるわけにはいかない。

私は眠気を覚まそうとし、コンテナに近寄る。

その冷たい鉄に、頬をぴたりと当てる。

夏に似合わないほど冷たいそれは、私をびくっとさせる。

「冷たっ……」

眠気が多少吹き飛ぶ。これならもう少し動けるだろう。
夜はまだ長い。
だが、時間がない。

――急がなくては。
私はそう思い、また門の方へと向かう。
どのくらいの周期で空いてるのかわからないが逃す方が惜しい。

早足。
ほぼ安全だったコンテナから離れるのが急に怖く感じた為だった。
空いていることを願いながら、ひたすら歩く。

……願っているが。

先ほどから10分少々しか経っていない。門もそんな高頻度で開くものでもないは

ずだ。
逃すのが惜しいという思いと、”よまわりさん”に襲われるかも、という恐怖が私の中で入り混じる。
こんな早く出なくても良かったんじゃないか？
３０分くらいは待つべきじゃなかったか？
「……」
どっちが良かったかなんて、私には分からない。
リスキーな行動。
常に死と隣り合わせのこの場所で、数打ちゃ当たるようなやり方は危険すぎるのだ。
そんな後悔と、僅かな希望を持て余しながら歩く。
お願い、開いてて……。

やがて、辿り着いた。
扉は開いていた。

「……良かった……」

張り詰めていた肺を緩ませるように、大きく息をついた。

この隙を逃してはいけない。

私は足早に工場の外へと出る。目の前で閉まったりなんかしたら絶望だ。
やっと抜けたという安心感を覚えながら、おもむろに振り返る。

――そして私は、振り返ったことをすぐに後悔する事になった。

「――――――ッ!!」

そこにいた。
いくつもの手のような白い触手に黒い身体を引きずらせているその姿が。
顔の部分に見える目のような、横に一本の線が入っている白い仮面が。
私の真後ろに、いた。

「よ……”よまわりさん”……」

私はぺたりと尻餅をつく。
頭の中がサーっと冷えて、ジワジワ熱を持つ。

逃げなきゃ。
早く……早く逃げなきゃ。

わかってるのに、足が動かない。
近すぎて逃げれる気がしない。
震えて動けない反面、”よまわりさん”はただじっと工場の門を境にして私を見ている。
扉は全開だ。工場の外まで追って来れる。
身体は私の意思に反して立って逃げ出そうとしているが、力を入れるとガクガクと震えて再びぺたんと座り込んでしまう。
数十センチしか離れていないのだ。
たとえ立てたとしても逃げる事は不可能という事実が、私をここまで恐怖させているのだろう。

「……ッ」

恐らく数分が流れていた。
一向に動かない”よまわりさん”に、私は違和感を覚えた。

「……な、なに……？」

何かおかしい。そもそも、なぜこんな真後ろにいながら私を襲わなかったのか。
いや、でも。
そんなはずは……。

「……見逃してくれるの？」

そんな事をふと思いついた。
私がそう呟くと、〝よまわりさん〟は工場の奥へと去っていった。

「……見逃すんだ……」

少々拍子抜けしたが、見逃してくれるならそれはそれでいい。襲われるよりかは遥かに良い。

私はゆっくり立ち上がり、服についた砂を払う。

さて、どこに向かうか……。

「……！そう言えば……」

妹を追いかけている最中に、妹の背負っていたリュックから何か落ちたのを思い出す。

あの時は、拾うようなそんな余裕がなかったが、それがなんなのか確認するだけしたほうが良い気がする。

工場を出て道沿いに歩く。

記憶があやふやだが、このまま道沿いに行けば再び商店街まで戻れる……はずだ。

”ナニカ”達も周辺にはいなかった。それもそのはず、”よまわりさん”が出る時に限って、何故か”ナニカ”達はいない。

さっき、”よまわりさん”が現れたせいなのだろうか。

そんな事を考えながら歩いていると、やがて大きな橋に出た。昔は工場に行く人々のために使われていたであろう大橋は、いまや割れたコンクリートが散乱する通りにくいものとなっていた。

しかし耐久性だけはあり、まだ自動車やトラックが通っても崩れる事だけは無さそうだった。

オイ

「！」

橋を半分渡りきった途端に何か聞こえた。

端的な音だったからか、気のせいとも思えた。

私は再び歩き始める。

オイ

再び声。
今度は確実に聞いた。しかし、音はそれだけではなかった。

びちゃびちゃと何かが橋に来る音。異様に大きな気配はすぐさま斜め後方から感じ取れ、そして背後に回った。

「……ッ！」

正直、振り向きたくない。
もう追われるのは散々だ。
ましてや背後にいる絶対に大きいであろうモノにこれから追い回されるなんて、最悪すぎる。
しかし、振り向かなければ相手との距離を測れない。
今この状況の私には振り向く以外の選択肢は残されていなかった。

「……はぁー……」

深く息を吐き、叫ぶ準備もして、意を決して恐る恐る振り返る。

――――橋いっぱいに広がる球体がそこにいた。

グネグネと黒い管のようなものが隙間なく纏わり付いていて、所々に大きさがバラバラの眼が大量に見えている。

それは、グジャラッという潰れたような音とともに、大量の黒い手を周囲に伸ばした。

当然かのように私は悲鳴をあげ、逃げ出す。虫ですら苦手なのに、こんな姿をしたものまで現れたらたまったもんじゃない。

その黒い巨大な”ナニカ”は時々真っ黒な球体を飛ばしては、一本に連ねた巨大な手を長く伸ばしてくる。

飛ばされた黒い球体は私の前まで来ると、近所の学校付近にもいたような球体に大き

な口がついた化け物に変化した。
私はそれらをギリギリで交わしながら逃げ続ける。だが相手も巨体の割にスピードがある。なかなか距離が離れない。
……距離が離れないのは、私自身の足も限界に近いからでもあった。

その時だった。
道の角の公衆電話が鳴った。
「ムカデの神様っ……」
私は咄嗟にそれを思い出し、公衆電話に駆け込む。
「お願いっ……助けて！」

――しかし、受話器を取ったというのに、世界が暗転しない。

「な、なんで……」

疑問の言葉を口にするが、すぐに気づく。
ムカデの神様にはもう力が残っていない事を。

さっと後ろを振り返る。
巨大な”ナニカ”は、もうすぐそこまで迫ってきていた。

私は公衆電話を飛び出し、更に走った。これはもう私が振り切るしかない。

……でも、どうやって？
ここからどこに行けば良い？

私だってそんなに体力があるわけがない。いつまでも走ってるわけにはいかない。
動悸が激しくなる。
すでに疲弊している身体は、いつもよりも早く私に疲れを感じさせた。
このままじゃいつか捕まる。

……そんな事はわかってる。
解決策だ。
それを探さないと……

考える事と走る事の両立がどれだけ難しいか、かつて考えた事があっただろうか。
疲れのない頭なら思いついたかもしれないが、眠気も混じったような頭じゃ何も思いつかない。

……なのに、死にたくないって事だけは頭にすぐ思い浮かぶ。死にたくないのはわかってる。だから考えなければならない。

「っああ―！もう！来ないでよっ！」

そんな叫びも届くわけがなく、黒く巨大な”ナニカ”は追う事をやめない。

足が重い。
喉が痛い。

胸が苦しい。

――――私はこんなとこで死んじゃうの？

そんな考えがよぎったその時。

「こっち！」

路地から出てきた何かに私は手を引かれる。限界だった足は、手を引かれる事でただ転ばないように反射的に踏み出すようになる。

私は手を引っ張ってくれる何かを見る。

背は小学生くらい……妹と同じくらいかな。ちょうど私の目の前に青いリボンが揺れている。

青いリボン……。

青いリボン？

私は咄嗟にそ、の、子、の、左、腕、を、見、た、。

――――ない。ただ袖口が揺れているだけ。

私の疑惑は確信に変わる。

「ハルちゃん!?なんでここに……」

「それはあと！今は逃げよう！」

ハルは振り返らずに私にそう言った。片腕で私を引っ張り、足だけで力強く走る。

速い。
高校生の私にも劣らない速さ。

「……ハルちゃん……」

ハルが来てくれたことに、私は安堵した。この状況で独りじゃなくなった事は、私にとっては大きな救いだった。

やがて商店街入り口へ。
ハルは最短で曲がり、商店街を突っ走る。

黒い巨大な”ナニカ”との距離は離れているが、ハルはそれ以上離すことはしなかった。
私はこんな状況下でありながらも、逃げたいという思いから聞いてしまった。

「ハルちゃんっ、どうして距離をもっと離さないの?」

その問いには、ハルは答えてくれた。

「あれは〝群霊〟って言うの。離れすぎると小さい霊に分裂して、今より速く追ってくるの。それじゃ逃げきれない。だからあの状態で、私達をギリギリ追えるような距離にいれば分裂しないし、このまま逃げ切れる」

「に、逃げ切るってどこに!?」

「神社だよ！そこに行けば、〝群霊〟は追って来れない！」

予想以上に知っていた。

妹もこれぐらい知っているのかな。

私とハルは商店街を駆け抜ける。

工事中の看板や、仕切られたフェンスを避けて更に走った。

やがて商店街を抜け、神社に向かってラストスパートを切る。そして難なく神社の中に入ることが出来た。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

お互い息を切らす。そうしている間に、”群霊”も神社の前にたどり着く。

おぞましい叫び声をあげ、神社に突進しようとする”群霊”。

しかしその時一瞬だけ世界が変わった。

次に戻った時には、”群霊”が消滅している光景が見えた。

「……助かった……」

私はハルにお礼を言う。

「ありがとうハルちゃん。ハルちゃんが来てくれなかったら私ダメだった」

「私も偶然だったから、気づけて本当に良かったー」

私は疲れすぎて、石畳の上にパタンと倒れ込む。ハルはそんな私を覗き込みながら、

軽く笑った。私の疲労を、ただ”群霊”に追われただけじゃない事をわかったようだ。

「そんなに疲れる事があったんだね」

「そうね……。……あ、そういえば」

さっき聞こうと思った事を思い出した。が、ハルはそれに気づいてくれた。

「そうそう、私今おばあちゃんの家に帰ってきてるの。それで隣の町の方に来てたんだ」

「あーそっか、お盆だもんね……。でもなんでこんな夜中に出歩いてるの？」

「本当は花火大会見て帰る予定だったんだけど……こともに会いたくなって」

ハルにそう言われ、私は困惑する。

どんな顔して言えばいいだろう。

私が甘すぎたばっかりに、妹は……

その時、私は走っていて忘れていた事を思い出す。

「あっ！そうだ落とし物……」
「……落とし物？何か落としたの？」

ハルは不思議そうに首を傾げる。私はこれまでの経緯を話そうとしたが、止めた。
ハルまで巻き込むわけにはいかない。言えば絶対に着いてきそうな気がした。

「そ、そう！商店街で落としちゃって、ちょうど取りに行く所だったの」

私は作り笑いをしながら誤魔化そうとした。
しかし、ハルはちょっと良くない顔をする。

「……疑って悪いんだけど……なんでこんな夜中に？それもどうしてあの工場に続く橋から？」

……バレてないよね。
私は努めて平静を装って答える。

「……何かに襲われて、気づいたら工場のコンテナの中にいたの。そこから何とか抜け出したところ」

――――我ながら、良さげな嘘をついたと思う。

「あー、”よまわりさん”に攫われたんだ。よ、く、抜、け、出、せ、た、ね、」

普通は抜け出せない。

あの工場は”ナニカ”の巣窟でもあり、そして”ナニカ”がいない所には”よまわりさん”が襲ってくる。相当運でも良くない限りは抜け出せないような所だ。

「あれは運が良かったというか……」

「運が良かったってどうして？」

「その”よまわりさん”に襲われる事無かったし」

「……どうして”よまわりさん”に襲われると思ったの？ただの廃工場なのに」

「あ……ッ！」

……それはそうだ。
何も知らない、なら襲われる事も知らないという事になる。
つまり、”襲われる事は無かった”なんて言葉は出ないのだ。

……私は思ったより、夜に慣れすぎていたらしい。

「……えーっと」
”よまわりさん”と”ナニカ”が廃工場に潜んでいる事は知ってたんだね。多分だけどお姉さん、前にも攫われた事ない？」
「……うーん」

答えに詰まる。
攫われたと言ったとしたら最初に”よまわりさん”をわからないフリしたのがバレ

る。
しかしさっきの発言のせいで攫われてないとも言えない。
思ったより、私は単純だったようだ。
ハルの誘導に簡単に引っかかってしまっている気がする。
今思えばハルが言った「よく抜け出せたね」は引っ掛けだったのか。
ハルはさらに聞いてくる。

「……なんだか夜に慣れてそうだね。そこまで知ってるのに、どうしてこんな危険な真夜中に落とし物を……？」
「……えと……」

ハルの言う事は最もだ。
こんな夜の町の危険を知ってたら、尚更家から出ようとは思わない。
答えあぐねている私に、ハルは心配そうな顔をして聞いてくる。

「……何かあったの？」

返す言葉が見つからない。
誤魔化しきれなくなった私は、半分諦め話すことにした。

「……そっか。こともが……」
ハルは少し不安そうな顔をする。
「うん……本当、どこに行っちゃったのか……」
私がそう言うと、ハルはすぐさま私の予想通りの言葉を口にした。
「私も探すよ。お姉さん1人じゃ危ないし」
「だめ」
私はすぐに断った。

半分諦めたが、もう半分は諦めてない。
ハルは絶対に行かせない。
ハルには父も母も、それに祖父母もいる。そんな立場で、こんな危ないことに巻き込むわけにはいかない。

「ごめんねハルちゃん。気持ちは嬉しいけど、ハルちゃんには帰りを待ってる家族がいるでしょ？だから着いてきちゃだめ」
「でもお姉さん1人じゃ、誰も助けに来てくれないよ？」

さっきの”群霊”の事を心配しているのだろう。たしかに、私のあの様を見た後ではハルが心配するのも無理はない。
ハルは現実的な事を言ってくれている。夜の”ナニカ”に関わるのは、本当に甘くない事を知っているから、なのだと思う。
それは私もよくわかっている……つもりだ。

「心配してくれてありがとう。でもハルちゃんまで巻き込まれちゃうよりは全然良いよ」

「で、でも……」

なかなか食い下がらないハル。本当に心配しているという事が伝わってくる。

――その時だった。

「いっ――――!」

ハルが無い左腕を押さえながらよろめいた。今にも倒れそうだ。

「ハルちゃん!?」

私は驚き、すぐにハルの元へと駆け寄った。顔を見ると、痛みに耐えているのがわかった。

ハルは左肩を抑え、座り込む。

「どうしたの!?傷口が開いたの……?」

私は焦りながらそう聞くと、ハルは首を横に振った。

「ひっ……ぱられて……」

「……え？」

ひっぱられて……

引っ張られてる？

何に？

私は直感的に右を向いた。

そこには、ハルと同じくらいの背の茶髪の女の子が、ハルの無い腕を掴んで、いた。赤いリボンが特徴的だった。

しかし、この世のものではないことも見てすぐにわかった。

あまりにも薄い。

半透明よりもっと薄い存在だったのだ。

「だ、誰……？」

その茶髪の女の子は、ハルの方を見て少し怒っているような顔をしていた。それでいて何か言いたげだ。

ハルは私の発言に聞き返してくる。

「だれ、って……誰か……いるの……？」

「あ、うん……ハルと同じくらいの茶髪の女の子……」

私がそう言った途端、ハルの顔色が変わった。

しかし、ハルはすぐに顔色をもどす。

「ユイ……私は友達を……」

ハルがそう言いかけると、”ユイ”と呼ばれた女の子はハルの腕をグッと引っ張った。

「いたたっ……わかったよ……ユイ……」

……よくわからないけど、”ユイ”は私の気持ちを汲んでくれているのだろう。

ハルの”友達だから助けたい”という思いはよくわかっている。でもそれ以上に、残された人達の事を考えなくてはならない。

人によっては非情な話だ。

友達を見捨てろなんて。

でも、ハ、ル、が、も、う、関、わ、っ、て、は、い、け、な、い、というのは何よりも正しいと思う。

私が頼るべきなのはハルじゃない。もっと大人の人とか、お父さんとか。そういう人だ。

ハルは痛みから解放されたのか、何事もなかったかのように立ち上がった。”ユイ”という女の子も既にどこにもいなかった。

「ごめんね、迷惑かけちゃって」

しおらしく言うハルに、私は首を横に振った。

「ううん、迷惑なんかじゃないよ。気持ちは嬉しかったよ」

「そっか……」

ハルは少しだけ微笑むと、不意に何かを思いついたようにカバンから何か取り出した。

「お姉さん、ちょっと待ってね……」

取り出したのは紙と人形だった。

紙に何やら書いている。そしてそれを綺麗に折りたたみ、私に渡してくれた。

「本当に危険な時になったら、書いてある事読みあげて。その時その人形は絶対に離さないでね」

わけのわからないまま受け取った私は、適当な返事をしてしまった。

「え、あ、うん。わかった」

ハルは私の手を握る。

「死なないでね……。私は何もできないけど……絶対にこともを取り戻してくれるって信じてるから……」

そう言うハルの顔はやはり不安に包まれていたが、何となく妹が私を頼る姿に似ていた。

「わかった。気をつけるね」

ハルは私の返事を聞くと、クルリと神社の出口の方に向いた。

「……じゃあ、そろそろ帰るね。日が変わっちゃうと、きっとお父さんに怒られちゃうか

ら」
「そっか、ハルちゃんも気をつけてね」
「うん、ありがとう。またね」

そうしてハルは、私に手を振りながら走って神社の外へと行った。

「また、ね……」

見送りながら、私はそう呟いた。
”また”があれば良いんだけど。

「……さて」

とりあえず一度商店街に戻って、妹の落とし物を回収しないと。

私は神社に一礼し、その場を後にした。

第5話

「えーと、確かこの辺にあったような……」

場所は商店街。大体中央あたりだ。

私は辺りを懐中電灯で照らしながら、落とし物を探す。

やがて、その光に白くほんのりと反射するものを見つける。私は近寄り、それを確認した。

「眼帯……？」

それは妹の付けていた眼帯だった。私は手に取り、回したりして観察した。

「……わっ」

ちょうど目に当たる側が見えた時、私は少しびっくりした。

血だらけで、赤く染まっている。

「ことも……」

妹のあの空虚になった左目は、無くなってからたった数日で穴が空いたまま中の傷が塞がった。

それくらい嘘のように完治したそれが、出血を起こしている事をこの眼帯が物語っている。

妹の身に何が起きているのか。

「……」

私はふと顔を上げ、前を見た。薄暗い街灯に照らされた商店街の通路が目に入る。

……この少し先で、私は”よまわりさん”に攫われたんだっけ。

妹はどこに行こうとしてたんだろう。ただ逃げようとしただけなのかな。

この血塗れの眼帯といい、妹の不可解な行動への疑問が私の中で首をもたげる。
私は更に奥へと歩いた。
妹のあの不可解な行動を”逃げているだけだ”と結論づけるのは、もう少し調べてからでも良い。
やがて”よまわりさん”に捕まった場所に辿り着く。そこに来た時、私は足を止めた。
「……ッー」
そこにあったのは大穴だった。何かの工事の為なのかはわからない。
フェンスで通行止めになっているところが何かによって壊されていて、走っていればすぐに落ちてしまう状況になっていた。
妹はここを私に走らせようとしたのか。
……そんな事はありえない。

そんな事をする様な子じゃない。

もしかすると……。

というか、”よまわりさん”に攫われる直前にも思っていた事だけど。

妹はもう妹で、は、な、い、のかもしれない。

3年前の廃工場で出会ったあの狂った男のように、声に操られてしまっている可能性が十分に高い。

ムカデの神社で私の御守りを置いて行った事、そして”手”との接触。

そもそも御守りを手放した時点で、この夜において妹は無防備だ。

十分声に操られているという確証が持てる。

「……うーん……」

そしてもう一つわかった。

妹をすぐに生贄にせず私に差し向けてくると言うことは、私も生贄にしたいのだ。

私は考える。
御守りを手に入れてしまった以上、山の神は私に手を出せない。
それなら次は、それを手離させる為にもう一度妹を送ってくる事はほぼ確定的だ。手離すような状況を作ってくるはずだ。

――――そこまで考えた所で、ふと思う。
山の神は私が幼い頃から未だに、私を生贄にする事を諦めてはいなかったんだなと。
妹に封印されて尚、私を捕らえようとするその執念には本当に困らされる。

……いや、妹を手玉に取れたから手を出してきただけかも。
天敵となっていた妹が、山の神自身の支配下に置かれた。それは山の神にとって、完全に敵がいなくなったようなもの。

でも私は生贄になるつもりなんて毛頭ない。今度は私が妹を連れて帰るんだ。
私が向かうところはもう決まっている。

――――あの山だ。
トンネルの奥に行って、もう一度山の神を封印するんだ。
「……急がなきゃ」
私は血だらけの眼帯を握り、商店街を出た。

商店街を出た私は、来た道を辿る。
すれ違う”ナニカ”を避けながら、一本道をひたすらに歩く。
遠くから、踏切の音が聞こえてきた。
鳴り止まない踏切。
それを待つわけには行かず、私は遮断機を潜る。

幽霊列車はもう来ない。
妹が私を探しに出歩いていた当初は通ってたのだが、去年あたりから見かけなくなったらしい。
だから今は鳴ってるだけ。
くぐった所で轢かれたりなどしない。

そうして鳴り止まない遮断機をくぐり抜け、次の分かれ道まで進んだ時。

「あっ」

――――妹が、道路のど真ん中に立っていた。
私は一瞬気を緩めかけたが、油断してはいけないことに気づき身構えた。

今度はなんだろう。
着いていくのは多分良くなさそう。
……それとも襲ってくる？
そんな事を考えていると、妹は左に走り出した。

「また同じやり方……？」

二度も引っかかると思っているのだろうか。私は苦笑し、無視して進もうとした。

その時、何の気無しに走っていく妹にふと視線を向けた。

「ーーッ!!!」

妹は、近くにいた”ナニカ”に向かって走っていたのだった。

「なにしてっ……！」

私はすぐさま妹を追いかけた。

このままだと”ナニカ”に殺されてしまう。

妹と”ナニカ”の距離が迫る、迫る、迫る――――

「こともっ！」

私はすんでのところで妹を抱き抱え、横に転げた。
その瞬間、ポケットに入っていた御守りが外に飛び出した。

「あっ！」

――――短く声を上げたが、私自身どこか身構えている所もあったのかも知れない。
そのおかげか、咄嗟に伸ばした手は御守りに届き、再び握ることができた。
そしてすぐに立ち上がり、妹を背中に背負って走った。

「こ、こいつッ……」

最悪なことに妹が突っ込んでいった”ナニカ”は、ムカデ神社の前で会ったような燃える人影だった。

「はっ、はっ、はぁっ……！」

走って逃げるも、逃げられない事は確実だ。ましてや今は妹を背負っている。そして今度は、ムカデの神様に助けを求めることはできない。

妹を背負いながら走っている。当然のごとく急速に体力を奪われていく。スピードは確実に落ちている。

「どうやって逃げ切ったら……」

せめて、せめて”ナニカ”のスピードが下がってくれれば、振り切るだとかそういう解決ができるのに。

その時私はふと思いつく。

ムカデの神様から、清めの塩を貰っていた。妹やハルもそれで”ナニカ”を祓っていた。

もし効果があるのなら……!

迷っている暇などない。

私は片手でポシェットからなんとか塩の袋を取り出し、背後にバッと撒いた。

「お願いっ……効いて……！」

――その願いは叶った。

その上を通った”ナニカ”の動きが極端に遅くなったのだ。

「今のうちっ……」

その間に私は力を振り絞って思いっきり走り、燃える人影が見えなくなるまで走った。

……。

……。

……。

しばらく走り続け、疲れ果てて止まる。
サッと後ろを振り返る。
燃える人影は、もう追ってきてはいなかった。

「はぁっ、はぁっ……なんとか逃げ切ったみたいね……」

走っているうちにいつの間にか学校の近くまできてしまっていた。辺りにちらほらと”ナニカ”が見える。

でも、この位置なら見つからないだろう。
私は妹をおろし、膝に手をついて呼吸を整える。流石に連続で走っているせいか足の裏がズキズキと痛い。
そもそもこんなに走るのは何年ぶりだろうか。3年前の時ですらこんなに走る事は

なかった。

「……ろう……ん」

か細い声が聞こえて私はハッとした。妹の口が少し開いている。

「ことも？」

私はよく聞くべく近づき、耳を澄ます。すると、今度はハッキリ聞こえた。

「一緒に帰ろう……お姉ちゃん……」

妹はか細い声でそう言っていた。

「……」

私だって一緒に帰りたい。
帰って一緒に寝て、怯える事のない朝を迎えたい。もう夜に怯えるのはたくさんだ。
妹の言葉に、私は頷いた。

「うん、帰り、たい、ね、、ことも」

……でも、まだ帰れない。
私はもうそれ以上妹に触れず、2、3歩距離を置いた。
今の妹はもう完全に操られている事を、目に見えてわかってしまったから。
失った左目から血を流しながら帰ろうという妹。動作も喋り方もこの光景も。
3年前と全く同じ。
山の神は再現しているのだろう。

こうすれば、私がもっと近くに来てくれると。

「ごめんねことも。今は一緒に帰れないの。必ず助けるから……待ってて」

私がそういうと、妹は無い左目からギョロっと、大きな目玉を覗かせた。
妹は何かに操られたように立ち上がり、どこかへと走り去って行った。

「……」

私は強く、強く手を握りしめた。
妹を操られている様子を見て湧いた感情は恐怖ではなかった。
可哀想だともちろん思ったが、山の神に対する怒りの方が強かったかもしれない。

午前1時。
日が変わるまでは時の流れが遅いのに、過ぎた途端、加速する。
工場にいた時から既に3時間弱も経っていた。

そして私は、あのトンネルに向かって歩いていた。目的はただ一つ、山の神から妹を取り返すだけ。

――――山の神は、私から御守りを奪い取る事に失敗した。つまり山の神にとって、現時点では私はただの脅威となった。
そして私も、着実に山の神の元へと近づいている。
もう妹を使って私を捕らえようとする可能性は低い。妹が操られている事が私にバレてしまっているし、もうそんな距離もない。
それならきっと、妹だけでも生贄にしようとするはずだ。
時間がない。

急がなければならない。
歩いているうちに、空き地の近くまで来た。この一本道を道なりに進めば、トンネルまで行ける。
空き地をふと見る。
そう言えば、ここで”よまわりさん”に攫われたんだっけな。
……あの時はまさか、怖がりな妹がここまで来るなんて思いもしなかった。

「……」

この空き地は、妹が夜を怖がらなくなった原因の一つなのかもしれない。
いつも私にくっついてた妹が一人になって、夜を歩き回るきっかけになったんだから。

「……そうだとしたら、本当に最悪ね……」

事実、最悪だ。
妹が”ナニカ”達に関わる原因そのものになってしまったんだから。

――――しばらく空き地を眺めた後、私はトンネルに向かって再び進み出した。
肌にまとわりつくような嫌な空気。
山の神にとっては不都合か、それとも好都合なのか。

虫の鳴く声がうるさいくらいに響く。
その中にコツコツと、私の歩く音が混ざる。
やがて私は、凹んだガードレールを目にする。
ポロが事故に遭った場所だ。

「……」

胸が痛む。
あんなにポロに助けてもらっていたのに、何にも返すことができないままお別れするなんて。

私は御守りをぎゅっと握る。

大丈夫。
その後悔はもうとっくに整理がついた。
今は……今は前を見なきゃ。

更に歩き、角を曲がる。もう少し歩けばトンネルだ。

そして――――私はトンネルの前に着く。

「……相変わらず不気味ね……」

トンネルの奥から、異様な空気が流れてくる。絶対に入ってはいけない、関わってはいけないという事を直感的に感じさせる。
足がすくみそうになる。
過去に二回も、この先で怖い思いをしているのだから当然と言えば当然だ。

「……ッ」

それでも進まなきゃいけない。
進まなきゃ妹を助けられない。

私は意を決して、トンネルの中に入る。
カツーン……カツーン……と足音が響く。
雨なんてかなり前に一度降っただけなのに、未だに乾いていないトンネルの天井は水滴を滴らせている。
懐中電灯の光だけしか見えないトンネルの中は、どこまでも壁が無い暗闇の様に見えた。

私は戻って来れるのだろうか。
そんな恐怖がスーッと、不気味な風に乗って私に入り込んできた。

戻ってこれるのかな。

……いや、戻ってくるんだ。
そう思い込んで不安な気持ちをかき消す。

弱気になっては山の神の思うつぼだ。
神は総じて人の願いを覗くことができる。
悪い神は弱気になったところを狙って、甘い言葉を囁いてくる。
あ、の、時、もそうだった。
工場で手下に攫われた時、”安心していいよ”なんてふざけた言葉を私に投げかけた。
精神的に限界だった私は、愚かにもその声に耳を傾けてしまったんだった。

「大丈夫……私は怖がってない……」

そう言い聞かせ、足を前に進める。

やがてトンネルを抜ける。
あたり一面に広がる草むら。背が高く、だいたい私の胸あたりまである。
ざあざあと風に吹かれて、一斉に葉を鳴らす。鳴き虫の1匹くらい居てもいい様な草むらなのに、虫の声が全く聞こえない。
虫すら寄りつかない所。本当に危険だという事を改めて再認識した。

その草むらをなんとか掻き分けて進む。

しばらく進むと、さっきから見えていた大きな赤い鳥居が、視界に入らない程近くなる。

それをそのまま潜って進むと、途端に細い一本道になる。

――――来る。

周囲に小さな、黒い手が見える。

私を待っていたかの様に挟みうちされる。

私は急いで近くの祠に近づく。

この祠に、持っているお守りをかざせば私を守ってくれる。

しかし。

まだかざしてもいないのに、黒い手は少し躊躇しているようだった。その様子を見て、私はある事を確信する。

「……やっぱり、あなたたちにとって私は怖いのね」

私が最初に来た時と、次に妹が来た時で2度同じ目に遭っている。
明らかに警戒しているのが見て取れる。

……だからと言って油断はしない。
私は祠にお守りをかざし、黒い手達を追い払う。

次の祠までは距離がある。
急足で向かわないと、辿り着けないまま捕まる事になる。
今夜何度目の走りだろうか。
疲れ易くなった足は、十数歩走っただけで限界だと身体に訴え始めた。
ただでさえ走りにくい獣道。体力の消費も尋常じゃない。
私はふざけるなと足を奮い立たせ、次の祠へと走る。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

迫ってきているのがわかる。
じわりじわりと茂みから、数を増やして迫ってきているのがわかる。
それでも決して振り返らず走る。そんなものを気にしている暇はない。

そして辿り着き、急いでかざす。
祠にフワッと明かりが灯る。それと同時に周囲の黒い手達はスーッと消え去った。

「よし……」

急ぎたいが、少し休憩。
息を整えておかないと、次の祠まで辿り着けるかどうかわからない。

深呼吸をする。
焦ってはダメだ。

何度かの深呼吸の後、次の祠に向かって再び走り出した。

第6話

もう何個目の祠だろうか。

一つの祠ごとに少し休んでいるとはいえ、元々私自身連続して走り続ける事に慣れていない。

「はぁっ、はぁっ、ごほっごほっ！」

私は呼吸の苦しさに咳き込んだ。

喉が痛い。肺が苦しい。

……疲れた。動きたくない。

そんな弱音が頭に浮かぶ。当然といえば当然であり、普通の人なら諦めるだろう。

それでも、私は喝を入れるため自分を平手打ちした。

「バカ……そんな事考える暇があったら次の事を考えなきゃ……！」

私は通路の先を懐中電灯で照らした。真っ暗な道の先を、丸い光が照らし出す。

「……次はキツいか……」

今度はもっと遠かった。
ただ”遠い”と言う事に、今どれだけの絶望感を感じたのか。
ここまでは何とかギリギリでたどり着いていた。今度はその2倍弱はある。
捕まるか否かの前に、たどり着くか否かの方が心配だ。

……それでも進むしかない。
進むしかないんだ。
息を整え、覚悟を決める。

「……大丈夫、私なら大丈夫……」

そう言い聞かせ、挫けそうな心を落ち着かせる。”逃げたい”なんて気持ちはずっとずっと頭の中にあったし、今だって私を進行方向とは反対に動かそうとしてる。

怖くて……怖くて仕方がない。

捕まってしまったらどんな苦しい目にあって死んでしまうのか、想像がつかなくて怖い。

――でも今以上に、妹が居なくなることが怖い。

「……ッ！」

そうやって私はようやく覚悟が決まり、再び走り出した。鉛のように重くなった足を何とか前に運ぶ。

黒い手の気配が、すぐさま茂みから感じ取れた。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」

今の私には既に、走る体力など残っていない。ほとんど気力だけで動いていた。

「はぁっ、はぁっ、……っはぁ……！」

……私は守られてばかりだった。そして常に保身的だった。

お母さん、ポロ、ことも……。

何かしらを失う度に私は傷つく事は無かった。

直接的でも間接的にでも、護られつづけてた。

『私の力ではどうしようもない』

『しょうがなかった』

都合良く聞こえる言い訳をして、逃げ続けていた。

記憶の中に、お母さんの姿が浮かぶ。

――――あの時、お母さんは必死に私に助けを求めていたのに。私と同じくらい怖く

て、それでも生きたくて私に助けを求めていたのに。
私は逃げた。そして助けを求める言葉を、都合の良いようにねじ曲げた。
『――――逃げなさい。お母さんはもう大丈夫だから』
……そんな風に、私が逃げていい事にした。見捨てたんだ。そして綺麗事にしたんだ。
妹はそんな卑怯な私を、片目を失ってまで助けてくれた。
だからまた”私じゃ無理だった”とか”誰も助けてくれなかった”なんて言い訳、絶対に言いたくない。
「まだっ……まだ走れる……！」
後悔ばかりして、行動を起こす事もしなかった私が今。
こんなにも感情を突き動かされて、ただ一心に行動している。

――――きっと私は、少し嬉しかったんだと思う。

そうして走って、祠までの距離が半分を過ぎた頃。懐中電灯の光の先に、何か大きな影が映った。

「……えっ」

目の前に待ち受けたのは巨大な手。手首から先は無く、手の甲より少し手首側にある目が、怪しくぎょろぎょろと周りを見ている。

……かなり危険そうだ。

それは誰が見ても分かる。

どうする？

流石にこんなのに襲われたらひとたまりもない。抵抗できる間も無く殺されるのは確実だ。

後ろからも既に黒い手が迫ってきている。ここで突っ立っている暇はない。

そして最悪な事にその巨大な手の目が、私を見た。

狙いを定めたのだろう。

互いに見あう。

わずか数秒だったが、とても長く感じた。

「こいつ……」

ここで道を塞いで、後ろの黒い手に捕まえさせるつもりか。

そのつもりなら私は横をすり抜けるのみ。

サッと振り向き、黒い手との距離を見る。あと数十歩のところにそいつらはいた。

……まだ待てる。

突っ込んで簡単に捕まるよりマシだ。

もう少し様子を見よう。

そう思って、前を向いた時。

――――その巨大な手は、私に向かって突っ込んできていた。

「わあッ！」

私は驚き、地面を蹴るように足を踏み出して左に避けた。
巨大な手は私のすぐ横を通り過ぎる。

しばらく移動した巨大な手は私と１０メートル先離れた所で止まった。
そして目標を見失ったかのように、大きな目でぎょろぎょろと辺りを見回す。
そして再び、私に狙いをつけた。

私はハッとし、急いで立ち上がる。
来る。
また突っ込んでくる。

――最初に避けれたのは、本当に運が良かったようだ。

巨大な手が私に突っ込んで来るのと同時に私は走り出した。

スピードは明らかに負けている。しかし、巨大な手の挙動を見るに、狙い、を、定め、て、か、ら、一、直、線、に、し、か、進、ん、で、な、い、事に私は気づいていた。

「それなら……」

私は巨大な手の進路方向から大体直角に外れる。移動し終わった巨大な手が、再び私の方向に狙いを定めて突っ込んでくる。

そして私は再び進路方向から外れる。

こうしてジグザグに走る事で、上手く躱す事ができた。

「はぁっ、はぁっ、あと少しっ……！」

そう呟いて、再び進路方向から外れるべく茂みに近寄った時。

――――ガシッ！

「っ!?」

突然、茂みから黒い手が飛び出した。

その時、身を守ろうと咄嗟に出した右腕を掴まれてしまった。黒い手の重量が、力の無くなりかけた私の腕を地面へと引っ張る。

「離してっ！」

私は左手で黒い手を掴み、振り回しながら何とか引き剥がす。

かなり早く引き剥がしたつもりだったが、巨大な手が私に近づくには充分な時間だった。

私が引き剥がした時には、すぐ後ろに巨大な手が迫ってきていた。

「しまっ……」

――叫ぶ暇もなく、巨大な手は私を覆った。

目標を失った黒い手と巨大な手は、元の場所に帰るようにどこかへと散っていく。

何もいなくなり、暗闇だけが残る。

「……はぁっ……」

ガサッと私は茂みから身を乗り出す。すんでのところで、茂みの中に何とか身を転がして逃げ出せた。

「危なかった……」

捕まる寸前というのは本当に怖いものだ。

自由を奪われる事がどれだけ恐ろしい事なのか普段考えた事がある人がいるだろうか。

「……運が良かった」

――あそこまで追い詰められていては、たとえ上手く躱したとしても、逃げ切るのも容易では無かっただろう。

ただ真っ直ぐ走る時でさえ黒い手に追いつかれるか否かの速度で走っているというのに、こうジグザグに進んでいれば、必ずどこかで黒い手に追いつかれているのは明白

だった。

そんな事に今更気づき、少し身震いした。

私はそれだけ焦っていたという事でもある。

茂みにしか隠れる事の出来なかった状況になってくれたのは、ある意味好都合だったのかもしれない。

少し安堵。

茂みをガサガサと揺らして出る。

パチッと懐中電灯を付ける。

あたりを見回すと、再び黒い手達が私に近づいてきているのが見えた。

私は再び走り出す。

もう祠までの距離はそんなに無かった事もあり、簡単に辿り着くことができた。

祠にお守りをかざす。

優しい光と共に、周囲の黒い手達が蒸発する様に消えていく。

「ふぅ……何とかここまで来れた……」

横を見ると、神社に続く長い長い階段が見えた。遂にここまで来たのだ。
この階段を登りきれば、山の神の元へと辿り着く。

「……急がないと」

私はそう呟いて、階段を一段一段登り始めた。
中段あたりに祠がある事も確認できた。
まずはそこまで登ろう。
走るだけでもキツかった足だ。次の段に足を持っていくだけでも相当辛い。
私は足元を見る。
たった1日なのに、まるでもう使い古されたようにボロボロになった靴が目に入る。
靴下も大分傷ついて、破れている箇所がいくつか見えた。
足の裏は何度も擦れてしまっていたのか、じんじんと痛い。靴下の破れた所から血が少し出ている。

「……痛いなぁ」

少し落ち着く時間ができて初めて意識した途端、身体中のあちこちが痛い事に気づく。

登る度に痛む足を何とか堪え、登る。

もう少しで、もう少しで妹を取り戻せる。そう思うと痛みもあまり感じない……気がした。

――しかし、それでも登るのは遅すぎた。

私が十段弱登った時、階段の上から何か大きなものが来ている事に気づいた。

「……あれは……？」

懐中電灯の光を当てる。

その姿を確認した瞬間、私は目を疑った。

「嘘……！」

さっきのような巨大な手が、私の方に向かって降りてきている。
これでは先に祠に辿り着かないと、あの巨大な手を防げない。
私は急いで登るべく脚に力を込めるが上手く進めず、ガクッと膝が曲がるばかり。

「う……動いて……動いてよッ！」

そんな叫びも虚しく、限界をとうに超えている足は私の意思に反して動いてくれなかった。
そうでなくとも、上りと下りではスピードが段違いだ。まず間に合うわけがない。
私は巨大な手の位置を確認するべく再び懐中電灯を向けた。
たった今、巨大な手が中段の祠を過ぎた。
状況は絶望的だ。

「あ……ああ……」

逃げようがない。

さっきのような茂みだってどこにもない。

登るのが遅くとも既に十段ぐらいは登ってしまっている。今から降りて祠に向かうには時間が足りない。

「ど、どうしよう……」

窮地に追い込まれて焦っている私にこの状況を打開するなんて方法、思いつかない。

祠もだめ。

降りるのもだめ。

隠れるのもだめ。

八方塞がりだ。

いや、それならいっそ階段から転げ落ちて、下の祠まで避難する？

この高さで生き延びれるだろうか。

……無理だ。今の力の無い私じゃ落ちる身体を守ることもできない。

ここから落ちるというのは、学校の2階から受け身を取れず転落するのと同じ。
死ぬだけだ。

「だ、誰か……！」

私はそこまで言いかけた。
しかし、いないものに縋ったって何も起こらない。
その事に気づいて改めて私は”1人”だということを再認識した。なのに、頭の中では助けて欲しい人の顔が浮かぶ。

お父さん。お母さん。ハル。……ことも。

まただ。
勝手に1人で来ておいて、都合の良い時だけ助けを求めるなんて。

「……ッ！」

大人に頼らなかったのも自分。
ハルの助けを断ったのも自分。
あまりの情けなさに、唇を噛み締める。

「……なんで……私はこんなにッ……！」

――自分勝手なんだ。

もう数メートル先まで迫ってきている。
私はもう助からない。
このまま――。

――その時、声が聞こえた気がした。

『死なないでね……。私は何もできないけど……絶対にこともを取り戻してくれるって信じてるから……』

その声に、私はハッとする。

「……ハル……ちゃん」

そうだ。

ハルから貰ったものがあった。

こんな危ない時に使うものが。

私はポシェットを探り、一枚の紙を取り出す。巨大な手はもう迫ってきている。時間がない。

人形は出せずとも、読まなければ……！

私は紙を開いた。そこには、ひらがなのたった5文字だけが書かれていた。

一瞬戸惑う。

これを読むだけで、本当に窮地から抜け出せる……のか？

……何を迷ってる。

読むしかないじゃないか。

巨大な手とはもう数メートルの距離。

私は声に出して読み上げた。

「もう……いやだ！」

ジョキン。

何かが一瞬にして現れた。
それと同時に、巨大な手は居なくなっていた。

「……え？」

代わりに現れたのは、巨大な手と同じくらい大きく鋭い刃物を携えた、かなり大きな手の形をした”ナニカ”。
さっきまで巨大な手がいた所は、血で赤く染まっていた。
私が唖然としていると、その”ナニカ”はこちらを見た。ある想像が私の頭の中に浮

かぶ。

「まさか……」

……そのまさかだった。今度は私を切り刻もうと、大きく鋭い刃物――――もとい裁ち鋏を開く。

「まっ、待って……」

先程よりも絶望的な死を感じた。ハルは何を思ってこの”ナニカ”を呼ばせようとしたのか。

「……あ。人形……」

私は人形を思い出し、急いでリュックからハルに貰った人形を取り出す。

……これを代わりにできるのかな。

私は人形をそっと前に置く。

ジョキン。

”ナニカ”はその人形を切った。

そしてしばらく私を見つめた後、スーッと空間の隙間に消えていくようにいなくなった。

「……何だったんだろう」

”ナニカ”なのは間違いなさそうだけど、町に蔓延ってるような”ナニカ”とは違う感じがした。

……ハルもあの”ナニカ”に助けてもらった時があるのだろうか。

なんだかんだ、私はまた護られた。

ハルがくれたあの言葉が無かったら私は今頃死んでいた。

……私は独りじゃない。

妹だって、こんな暗闇に独りぼっちにさせない。

「……よし、行こう」

私はパシッと頬を叩き、再び階段を登り始めた。
中段の祠には思っていたより早く辿り着く。御守りをかざして、退路を確保する。
さっきのような足の震えは消えていて、今はただ力強く足を進めることができた。

残り数段。
3段、2段、1段――――。

そして私は、山の神の元へとたどり着いた。

第7話

「こともーっ！」

薄い望みをかけて、妹を呼ぶ。
だが、その声は響くだけで返事はない。

「……ダメか」

流石にそう都合良くはいかない。
今の妹はまだ、山の神の支配下にいるのが確定した。

私は境内を進む。
ここに来るのは3年ぶりだ。相変わらず不気味で、異様な空気がただよっている。
崩れた石畳の通路にその隙間から生えた雑草。こんなにまでボロボロになってしまったのか。

賽銭箱の無い拝殿。
3年前に連れてこられた時にも無かった。
本当にずっと昔から無いのだろう。

誰も知る事のなくなった、寂しい神社。
そして歪んでしまった神様の住む神社。
――そう考えると、少しかわいそうに思えてしまう。

「……」

……それでも、妹を攫う理由にはならない。
妹は返してもらわなきゃならない。
私は拝殿に向かって叫ぶ。

「妹を返しなさいッ！」

――その時だった。

その声に応えるように、幾重にも重なったようなおぞましい叫びが境内に響き渡った。

恨み、悲しみ、憎しみ、苦しみ……全てが混ざった様なおぞましい声だった。

見捨てられた神の悲痛な叫びにも、その恨みの声にも聞こえた。

しかしそう聞こえても、私は揺るがない。

「妹は私のものだ！あなたのものじゃない！」

――そう叫んだ途端、再びおぞましい叫び声が境内に響き渡るとともに、私は向こ、う、の、世、界、に引きずり込まれた。

その世界は周囲が真っ暗で、亀裂が入ったような地面は赤く不気味に光っていた。そして空は赤く、地面に近くなるにつれて黒く染まっている――そんな世界だった。

さっきまでの境内にあったものは拝殿も含め全て無くなっていた。
その代わりに、赤い地面からはたくさんの尖った岩が生えていて、その中には祠のようなものも混ざっていた。

「ここは……」

再び聞こえるおぞましい声。今度は近くに聞こえた。私はその声の方を向くとそこには……。

……複数の青白い人間が絡み合って顔を形成し、そして複数の目を持った醜悪なモノがいた。
周囲には大小様々な手が、私を睨みつける様に見ていた。

「山の……神……」

一時たりとも忘れた事のない、母を生贄にした山の神。
きっとこの声の中には、母の声も混ざっているのだろう。

そして今度は妹だ。
妹を生贄にしようとしているんだ。

……そんな事、絶対にさせない。

「……返してもらうよ」

私はそう呟いて、祠に向かって駆け出した。
疲れていたはずの足が、嘘のように動く。

この祠については、妹から聞いた事がある。
全部で6つあり、六角形のように置いてある。
それら全てにお守りをかざすと、この山の神を封印できる。

私は順調に祠に光を灯していく。柱に向かうたびに大小の手が私を阻もうとするが、

不思議とまともに走れるようになった私には追いつく事すらできていなかった。
こうやって走れるのは何故なのか。
ただ私の中から湧き上がる感情が、私を突き動かしているのは確かだった。

「――――」

山の神が様々な負の感情を持った様な音で、声にならない叫びを上げる。
まるで激しい殺意を一身に浴びているよう。
普段の私なら足がすくんで全く動けなかっただろう。

しかし今は違った。
妹を救う一心で動いている私には、そんな殺意など気にも止まらなかった。
私は更に祠に光を灯す。

「残り３つ……」

少しだけ、私は山の神の方を振り返る。

本当に神様なのか疑ってしまうくらい、醜悪で恐ろしい姿。
神様だと言うのに、左目を抉り出すという恐ろしい事をする神様。

……本当に、元は神様だったのかな。

鳥居は神様への信仰心を表しているらしい。
なので、鳥居の数だけ人の願いやお礼を表しているという。
しかし数十と鳥居が置かれた神社では、元は厄災を封じる場だった可能性もあるという。

それは厄災を神様として祀り、襲われないようにするといった考えからきているそうだ。
他の神社より沢山鳥居を置いて、信仰心が高い事を示し、ご機嫌をとるのだ。

……本当にそうなのかはわからないけど。
私はそんな事を考えつつ、更に祠に光を灯す。

「あと一つ……！」

最後の祠に向かって走り出す。

その状況を理解した山の神とその手下は、絶対にさせまいと私を阻んでくる。

しかし、それは阻むとは言い難い動きだった。

手下はただただ一直線に突っ込んでくるだけで、一方山の神は悲しみを湛えた叫びをあげて手を振り回しながら、私には到底追いつかないスピードで私に向かってきている。

……その姿はまるで、だだをこねる子供の様に見えた。

妹にこんな酷い事をしておいて、取られるとなったらこんなザマを見せてくるなんて。

「……バッカみたい」

いつもの私らしからぬ言葉が口を突いて出る。
普段の”大人のフリ”をしている私からは絶対に出ない言葉。
良いんだ。
今の私はただの”高校生”なんだ。

――――やがて、最後の祠にも光が灯る。
あまりにも呆気ないものだった。
山の神は苦しそうな叫び声を上げる。
そしてバラバラと身体が崩れ、消えていった。

「……あれ？」

私はいつの間にか、元の場所に戻ってきていた。心を落ち着かせる為に、少し深呼吸をする。

――あっという間だったが、なんとか山の神を封印できた。

あとは妹を連れて帰るだけだ。

私はそう思い、拝殿の方を向く。

「ーーーーッ！」

妹が倒れていた。

私は急いで駆け寄り、胸元に耳を当てる。

とくん、とくんと心臓の鼓動が聞こえる。

「良かった……」

操られはしたものの、妹は生きてくれていた。
私は心底ホッとした。
こうやって無事でいてくれた事がどれだけ嬉しかったことだろう。

「……それじゃあ、帰ろっか」

私はそう言って妹を背負う。
背中に生きている者の温かさが広がる。それを実感して、私はようやく思える。

「おかえり、こども」

眠っているような顔をしている妹に、そっと言う。何だか、とても久しぶりに言ったような気分になる。
そうして私は階段を降りようとした。

しかし、その時。

「ーーーー！」

声にならないおぞましい声が背後から聞こえた。さっきも聞いた、あの声。私は境内の方を慌てて振り返る。

「……嘘……！封印したはず……！」

現実世界に、あの醜悪な姿が現れる。

か、な、り、崩、れ、か、け、た、その姿に、私はゾッとする。

最後のあがきなのか。

その醜悪な姿から溢れ出るドス黒い執念は、肌で感じているだけで吐きそうになる。

私は急いで階段を駆け降りる。

早く逃げなきゃ……また”あの夜”の二の舞だ。

それだけは絶対に嫌だ。
もう救えないのなんて絶対に。

２段飛ばしで駆け降り、最後まで階段を降りきったところでさっと振り返る。

「……え」

速い。
さっきのスピードが嘘の様に、しっかり私についてきていた。

私は更に山道を走る。
茂みから出てくる黒い手達を間一髪でかわし続け、走りにくい砂利道を走る。

「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ……！」

ザッザッザッと砂利を踏む音と、背後から近づいてくるおぞましい声だけが聞こえ

る。
懐中電灯なんて照らしていない状況だ。地面の凹凸がわからないせいか、砂利道と足のバランスを取る事に気がとられて、体力の消耗が激しい。
今は、わずかに見える祠の光を頼りに進むしかない。

足の痛みが戻ってくる。
それでも走る。
呼吸がキツい。
それでも走る。
肺が痛い。
それでも走る。
肉離れしそうな痛みがくる。
無理やり動かし、走る。

「痛い痛い痛いいッッ!!!!」

私はそう叫び、痛みを誤魔化して走る。

痛い。
痛い。
いたい。

――でも、それ以上に今を諦めたくない。

「動けぇぇッ!!!」

……3年前に、私は約束した。
妹は巻き込まないって。
それなのに結局防げなくて、妹が左目を失った。結果的に約束を破ってしまったんだ。
今日だって、ポロにも、ハルにも、絶対に連れて返ってくるって約束したんだ。

――破りたくない。絶対に破るもんか。

何より私自身が、妹を――――こともを助けるって決めたんだ。

また、何一つ守れないなんて絶対に嫌だ。

こともも。

私の可愛い妹。

私には勿体ないくらいの妹。

そして私を助けてくれた、勇気のある妹。

『独りぼっちは嫌だよ』

3年前のあの日、あの神社で、倒れていた私にそんな弱音を言っていた事を覚えている。

こんなに勇敢な妹でも、ずるく保身的な私を頼ってくれる事が、私は嬉しかった。

だから私が護るんだ。

妹に護られたように、今度は私が護るんだ。

……絶対に独りぼっちになんかさせない。

「うあぁぁぁぁぁぁぁぁッッッッ!!!」

激痛。足なんて草や小枝で引っ掻かれ過ぎて血だらけだ。

やがて、トンネルが見えてきた。

私は出せる限りの力を出して、走り続けた。

――しかし。

ドシャッ。

限界を超えすぎた私の足は、急に私の意識下から切り離された。

派手に転び、荒れたアスファルトに身体を打つ。私は妹を抱えるようにして転がった。

立ち上がらなければ、と思って腕や足に力を込めるが……。

「……あれっ……」

動かない。

ピクリとも動かない足。その様子はまるで、別の人の足のようになってしまっていた。

バッと顔を上げる。

山の神はすぐそこまで迫ってきていた。

……ああ。

私は息を呑む。

……やっぱり、そうなるか……。

私は、こともを自分の後ろ側へと回した。

本当は、こうなる事を少しわかっていた。だから覚悟もできている。

もう私は、お母さんの時のような過ちは絶対に繰り返さない。
1人残して逃げるような、そんな事はしない。
私が護ると決めたんだから。

……まだお父さんだっている。

妹は独りぼっちにはさせないよ。

逃げるな。
逃げるな、私。

震える身体を抱きしめ、覚悟を決める。

「……ごめんね、ことも」

……。

……。

怖い。

暗い。

何も見えない。

なんで、わたしはここに……？

……。

……。

……あ。そうだった。

あの手、のお化けの言う事を聞こうとして……。

あれ？何で聞いたんだっけ。

そうだ。おかあさんを取り戻してくれるって。

そうしたら、おねえちゃんも甘える相手が出来るって思って。

おねえちゃんが寂しそうな顔をすることも無くなるって。

……。

……。

……バカだな。わたし。
そんな事で、おかあさんが戻ってこれるわけないのに。

死んじゃったら、おしまいなんだ。
ポロだってそうだったのに。

……わたし、どうなっちゃうんだろう。

おねえちゃん、怒ってるかな。
山の神に自分から捕えられに行くなんて。

……。

怖い。

怖いよ。

独りぼっちは嫌だよ。

ごめんね、おねえちゃん。
もうこんなバカな事しないから……。

助けて――。

「う……ん……？」

長い眠りから覚めたような感じがして、わたしは目を擦る。

いつもの右目だけの視界が広がる。

……あれ？

あったかい……。

ここは……？

夜風が頬を撫でる。

その涼しさに、頭がハッキリしてくる。わたしはあたたかさを感じる方に意識を向けた。

「……っ！おねえちゃん!?」

わたしは、おねえちゃんに背負われていた。

時々ガクンと揺れながら、おねえちゃんは歩いていた。

周りを見渡す。
石畳の塀が右に見え、左にはガードレール。
……トンネルから出てくれば、こんな景色も見えるだろう。

「……おねえちゃん、おねえちゃん……」

わたしはおねえちゃんに会えたことに泣きそうになった。暗闇の中で独りぼっちだったのが凄く辛かったから。
あったかい。
おねえちゃんの背中。

その時わたしはハッとする。
そうだ。
おねえちゃんに謝らなきゃ……！

「あの、おねえ――――」
「ことも」

わたしの言葉に被せるように、おねえちゃんは私を呼ぶ。

「……なに、おねえちゃん」

……やっぱり怒ってるよね。
いっぱい怒って。こんなことしたわたしをいっぱい叱って。
怒ってくれたなら、わたしは――――。

「ことも……歩ける？」

「……え」

予想外の言葉に、わたしは戸惑った。
歩ける、って――――。
わたしは背中から降りて、おねえちゃんの隣へ並ぼうとする。

「うん、歩けるよ」

「そう。悪いけど、家までお願い……」

言い切る前におねえちゃんの身体がぐらりと大きく傾き、そのまま倒れ込んだ。
わたしは驚き、おねえちゃんを抱き起す。

「おねえちゃん、おねえちゃん！」

必死に呼ぶが、返事がない。
少し揺らしてわたしは必死に呼ぶ。

「おねえちゃん、おねえ――――」

そこでわたしは言葉を切った。
わたしの腕に何か液体のような、生暖かいものが触れた。
恐る恐る、腕を見ると。

「……血？」

おびただしいほどの血が、わたしの腕を伝う。再び驚き、おねえちゃんを見る。
片腕の抑えが無くなったおねえちゃんが少し横にだらんとずれる。

……その時、わたしは見てしまった。

「おねえ……ちゃ……」

おねえちゃんの左目が。

……ぽっかりと無くなっていた。

第8話

あれから1週間が経った。
私の目は妹の時と同じように、驚くべき早さで塞がった。
片目は本当に大変で、今でもまだ無くした次の日のように、手でふらふら距離感を確かめたり転んだりする。

あの日から2日後、私はお父さんに電話した。
これまで起こった事や、今どんな事になっているか……そんな話をする為だ。
会話していて、向こう側で泣いている事がすぐに分かり、その反応はとても痛々しかった。
でも私が親なら、きっと今のお父さんと同じ反応をするだろう。
しかし結果的には無事でいた事もあり、色々前向きなことを言うと、とりあえずは安心してくれたようだった。
明日には帰って来てくれるらしい。
お父さん曰く「こんな時に仕事なんかやってられない」との事だった。

今は昼下がり。
しばらく学校を休むことになり、家で大人しくしている。

「……はぁ」

……私もまた、妹のように片目を夜に置いてきてしまった。
夜にしか見えなかった”ナニカ”が、昼でもうっすらと見える。見えてしまう。
昼間の彼らは弱々しく、通り過ぎる人を恨めしそうに見つめているだけ。
妹が言った通りだ。
私は携帯を弄りながら、1週間前の事を思い出す。あのトンネルで起きた事を。

「……ごめんね、ことも」

私はザリザリと、腕と辛うじて動く片足を使って山の神に近づく。山の神は変わらず私に向かって醜い声を上げる。

やがてその距離が数メートルになる。

山の神は私を捕らえんばかりに、ゆっくりと無数の手を伸ばす。

【オマエモ　イケニエニ】

頭の中に声が聞こえてきた。

もうそんな事しか考えられないのだろう。

「……本当に、神様だった頃を覚えてないのね……」

【イケニエニ　イケニエニ】

山の神が伸ばした手が私の肩に触れる。

「っ……」

手が、私の肩をガッシリと掴む。氷の様に冷たい手が私の肩に食い込む。
強く指が食い込むような痛みが、私の顔を歪ませる。

それでも構わず、私は話した。

「……きっとあなたは元々、こんな山に囚われる存在じゃなかった。今と同じように人に仇をなす”厄神”だったから。それを昔の人達は恐れた。だからあえてあなたを神様と讃えて、お供物――――左目を差し出す代わりにこの山から出ないことになった……そうでしょう？」

ただの私の考察。
今はそう考えるしか、納得出来なかった。
1本……2本と山の神から白い手が伸び、私の腕や肩を掴む。

「それなのに、私達人間はあなたを閉じ込めたまま、お供物をやめた。そして都合いい時だけ勝手な願いを押し付けた。歪んでしまうのなんて当然だよね」

私の身体が、ゆっくりと引きずられる。

「ごめんなさい。でも……こんなこと、もうやめましょう？いくら人を生贄にしたって、人の身体で自らを覆ったって、お供物をくっつけたって寂しさなんか紛れないでしょ？」

【イケニエ……イケニエ……】

山の神は私の言葉を聞いているのか、いないのか。それはわからないけど、山の神にとってはそ、う、するしかない事だけはわかった。

生贄に縋るしか、もうこの世に残る方法が無いのだ。

私は軽く深呼吸をし、ある覚、悟、をして話を続ける。

「最後に、私の願いと引き換えにあなたに左目をあげる」

――――私は一つだけ、気づいていた、

3年前、あのトンネルで山の神に追いつかれた時、妹は”家に帰りたい”と願った。山の神があのまま妹の願いを叶えずに追いつけば、私達姉妹を生贄に出来たのに、それをしなかった。

それは何故なのか。

答えはもうわかっていた。

しなかったのではなく、”出来なかった”。妹がお供物である左目を差し出し、願ったからだ。

左目を差し出すと山の神の意志に関係なく願いを叶えられる……と言う事になる。

つまりこの状況を打破するには、逃げる為の願い事をし、左目を差し出せばいい。

妹の為だ。目の一つくらいくれてやろう。

……でも、私はそんなに愚かじゃない。

私は逃げる為に左目を差し出すんじゃない。
家族を護る為に差し出すんだ。

「……その前に」

山の神との距離、数メートル。
私は意を決してある言葉を口にした。

ジョキン。

突如として現れた裁ち鋏を持った”ナニカ”によって、私を掴んでいた手が切られる。山の神は悲鳴を上げ、何歩か引き下がる。

「……もう、終わりにしましょう」

山の神はのたうちまわる。大きな裁ち鋏を持った”ナニカ”は、私の方を向いている。

私の願い。それは――――。

「私の願いは……この”ナニカ”の身代わりになって欲しい事」

……パンッッ……！

そんな音と共に、私の左目が破裂する。

「うぐっ……！」

私はその場にガクッと体制を崩す。尋常じゃない痛みが私を襲う。

その状況でも、私はもう一つの目で山の神を見やる。

……願いは叶えられていた。その裁ち鋏を持った”ナニカ”の標的が山の神に変わる。

「……さようなら、山の神……」

――――片目の視界を奪われたせいではっきりとは見えなかったが、何度も何度も切断する様な音が聞こえた。
そして裁ち鋏を持った”ナニカ”が消える頃には、山の神の姿は無く、その辺りが血で赤く染まっているのがうっすらと見えた。

「……まあ、これはこれで良かったのかな」

私はそう呟いた。

勝手に縛りつけておいて、勝手に葬ってしまうなんて……本当に身勝手な事だけど。

……あの裁ち鋏を持った”ナニカ”について携帯で調べてみると、どうやら”理様”と呼ばれる神様だったらしい。

”もういやだ”と言うと悪い縁を切ってくれる、縁切りの神様なんだそうだ。

ただ、その切ってもらうかわりに、手と足があるものを差し出さなければならない。

「……そのための人形だったのね」

その神社自体は隣町にあるらしく、今も残っていると記載されていた。

「ハルちゃんも助けてもらった事があるのかな」

……流石にあるか。

でなければ私にあの言葉を教えようとはしない。

あの時で、私と山の神の縁は切れた。

山の神自体も、無くなった。

それでも、この町には沢山の”ナニカ”が潜んでいる。今でもこの町をウロウロしていて、とても安全とは言えない。

……けれど。

もう山の神に怯えなくていい。
それだけは確かだった。

その時、玄関から元気な声が聞こえてきた。

「ただいまー！」

そう言って、トントンと階段を登ってくる音が聞こえる。

「おかえり、こと も」

「ただいま、お姉ちゃん」

妹はあの夜以来、一人で夜を廻ることは無くなった。行くとしても私と一緒に、だ。
今回の件で私が左目を失ってしまった事が大きな原因だったのか、妹は夜に出歩く理由を教えてくれた。

……どうやら、私を怖がらせたくなかった為らしい。
妹曰く「家にいると変なオバケに襲われるから」だと言うのだ。
その変なオバケがなんなのかはわからない。
左目を失ったあの日から出会うようになったらしい。
という事は、私も襲われるようになるのではないだろうか。
そういう考えから、私と妹は一緒に夜に出歩き始めたのだ。

と言っても、私だって学校があるし遅くまで廻ってられない。日付が変わる前には必ず妹と一緒に帰るようにはしている。

「お姉ちゃん……左目、大丈夫？」

私の顔を覗きながら、心配そうに言う。

これも毎日だ。

「大丈夫だって……心配してくれるのは嬉しいけれど、心配しすぎも良くないよ」

「だって……」

妹がこんなに心配するのは、”自分のせい”だと思っているからだろう。

その気持ちは痛いほどわかる。

かつての私がそうだった。

……3年前、私の代わりになんで妹が……と、毎日毎日悔やんでいた。私が助かる価値は、妹が片目を失ってまで手に入れていいものなのか、と。

でもこの事について、私自身妹の事はあまり心配していない。

妹はそのうち気づいてくれる。

だって3年前、妹は片目を失ってまで私を助けてくれたから。
あの時私を置いていかず、一緒に家に帰る事を選んだんだから。

私が妹に思っているそ、れ、と同じ。

因みに、今回の件で妹には一切怒る事は無かった。形はどうあれ、妹は私のために動いてくれたのだ。
妹は叱って欲しそうにしてた。それはきっと罪悪感からくるものだろうし、本当に悪いと思っているからだろう。
しかし結果が伴わなかっただけで、その行動自体は悪くない。

……むしろこれで叱ってしまったら、私の方が悪いような気がする。少なくとも今回の件には私にも原因があるのだ。

その時、突然家のチャイムが鳴った。

「……誰だろ？なんか配達物あったかな……？」

私は階段を降り、玄関に向かう。セールスはこんな田舎には来ないし、宗教の類もこの町には来ない。

来るとしたら配達員か、それ以外の誰かだ。

「はーい」

私は返事をする。

すると、子供の声が聞こえてきた。

「あ、お姉さん。ハルだよ」

「あーハルちゃんか。今開けるね」

玄関の鍵を外しドアを開ける。1週間ぶりの筈なのに、昨日会ったような感覚にな

る。

「こんにちは。どうしたの？」

「こんにちはお姉さん。って……えっ!?」

ハルは私の顔を見るなり、驚く。

当然と言えば当然だ。1週間前に会ったばかりと言うのに、突然左目を失っているんだから。

「あぁ、左目でしょ？ちょっと色々あってね……でも、ほら」

私はいつの間にか後ろに来ていた妹を、ハルの前に引っ張る。

「ハル、久しぶり……」

「あ！ことも、帰って来たんだね！」

嬉しそうにことも に駆け寄り、手を握るハル。

妹は若干照れながら、小さく「うん」と返事をした。

「もう、心配したよー」

「うん……ごめんね……」

その時、私はふとハルの後ろにいる女の子に気づく。

「あなたも来てたのね。えーっと……」

するとその女の子は人差し指を唇に当てた。静かに、という意思表示……だろうか。

よくよく見ると、その子は1週間前にハルの腕を引っ張ってた子だった。片目を失った影響なのか、昼間だというのに女の子がハッキリ見える。

……もしかして、ハルに気づかれたくないのかな？

「どうしたの？お姉さん」

ハルに聞かれ、私は適当に誤魔化した。

「ううん、なんでもないよ。……それで、ハルちゃんはどうしてここに来たの？」

話題を変え、話を逸らす。すると後ろの女の子はホッとしたような顔になった。

ハルは思い出したように言った。

「実は今日でもう帰っちゃうんだ。だから挨拶に来たんだよ」

「ああ、そういう事なの。わざわざ来てくれてありがとうね」

私がそう言うと、ハルは少しはにかんだ。後ろの女の子も笑顔になっていた。

その時、私はふと妹を見た。

目線はハルの方を見ているが、やはり後ろの女の子にも度々向けられている。

――――見えてるんだ。

しかしわかっているのか、妹はその女の子には一切反応せず、しばらくハルと話していた。

「……それじゃあ、またね」
「またね、ハル」
「うん。お姉さんもまたどこかで」
「気をつけてね、ハルちゃん」

ハルは手を振って、夕日に照らされた路地を歩いて行った。
私と妹は見えなくなるまで手を振った。

「……行っちゃったね」
「そうね……」

さっきの女の子は誰だったんだろうと考える。
その時、ふと思い出す。

『ユイ……私は友達を……』

ハルが女の子にそう言ってたな。
……親しい友達だったのかな。
でも、そんな感じを受けた。リボンやナップサックなど、お揃いを意識している様だったし。

また、ハルは来年の夏にまた来るのだろう。
きっとあの女の子の為に。
私はなんとなく、妹に聞いてみる。

「こともは、あのハルの後ろにいた女の子の事知ってる?」
「ううん、知らないよ。聞かない事にしたんだ」

……聞かない事にした、か。
そういう事に関しては私も同感だ。

「……さて、晩ご飯作るかなー」
「今日の晩ご飯なにー？」
「今日はね……」

そんな会話をしながら、私と妹は家に入っていった。

夜は怖い。
でも、それはいつか忘れる。
大人になるにつれて、忘れていく。
……それでも、いつかまたそ、ん、な、時、が来たら。

――夜に片目を囚われた私達は、再び夜の恐ろしさを思い出すのかもしれない。

夜廻お姉ちゃん　完